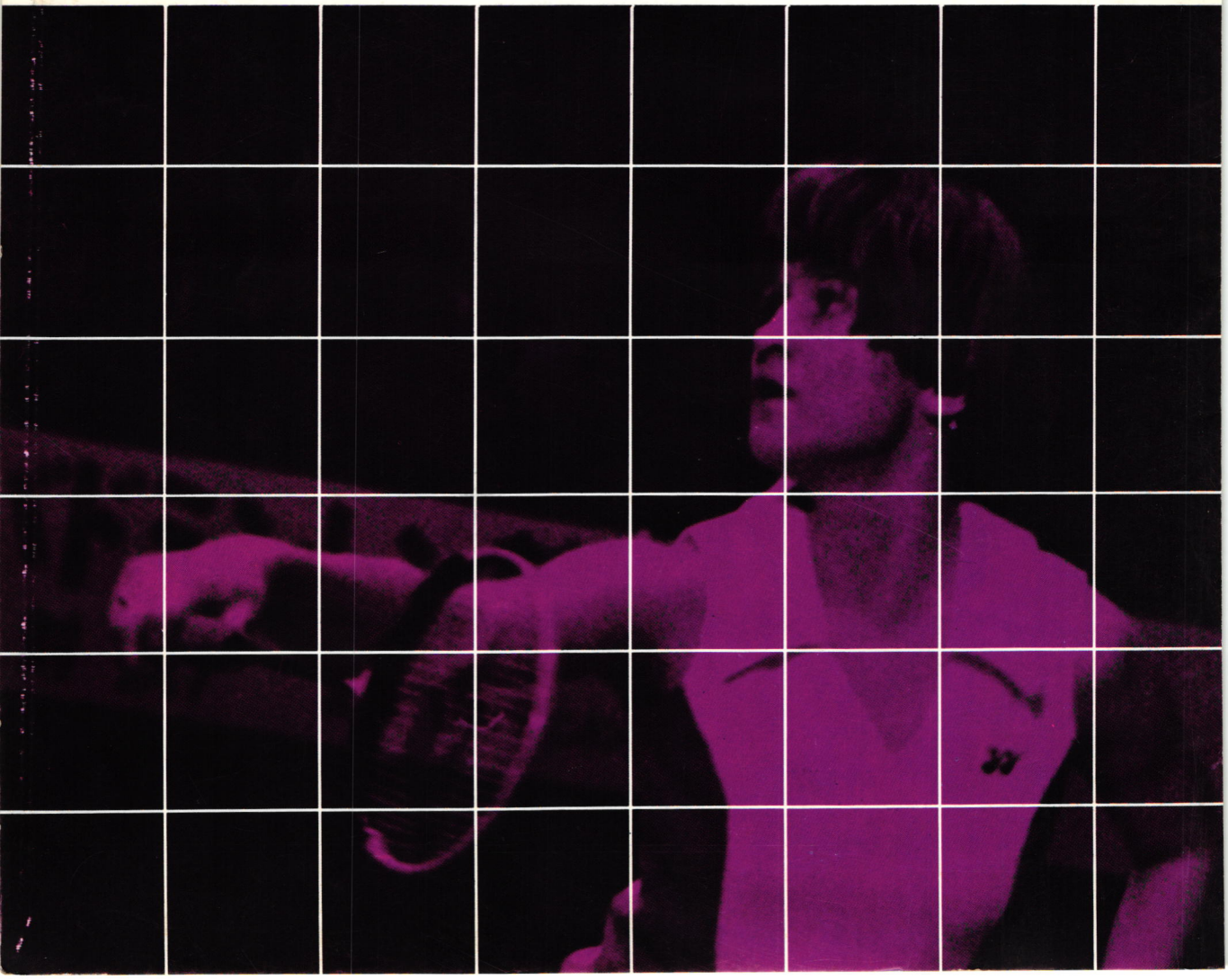
昭和44年12月23日第3種郵便物認可　昭和52年8月1日発行（毎月1回1日発行第9巻第8号）

バドミントン 8

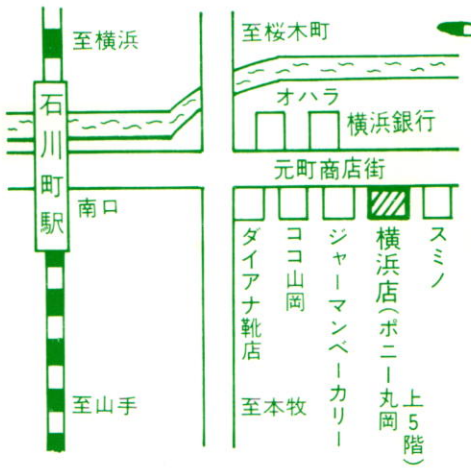
日本バドミントン協会　The Badminton World No. 94 1977



Fantastic!! MOTOMACHI

ファンタスティック!!元町

ラケットショップ元町・横浜店が3倍になって元町商店街へ!!



横浜店・横浜市中区元町5－203 元町スカイビル5階
☎045－651－2020 (ポニー丸岡上)

バドミントン8！

AUG. 1977

——第27回全日本実業団選手権大会詳報——

河崎ラケット奇跡の大逆転 …… 2
斉藤、初優勝へ大殊勲
サントリー輝く2連覇 …… 4
カワサキの執念実らず
“安泰„ 銭谷、王座を守る …… 6
“銭谷時代„ いよいよ本物か
神話くずれ、徳田初優勝 …… 8
会場騒然の興奮
栂野尾・飯野組、堂々の3連勝 …… 10
団体戦の無念をダブルスで晴らす
徳田、三冠目は高田の援護 …… 12
楽しみなコンビ誕生
遠藤、岡崎・飴谷に栄冠 …… 14
渡辺、森谷・星野が優勝 …… 15
日下・牛田組、余裕の独り旅 …… 16
2位は新婚直前の“熱いペア„

新・ガッツ小島の体当り実戦教室4 —— 小島一平
恐怖の大学1・2年時代 …… 26
われらのクラブ5 —— 田園ジャンボクラブ
ヘビー級で頑張ってま〜す …… 28
エツコのバドミントン・ライフ3 —— 栂野尾悦子
湯木さん、相沢さんとの出会い …… 32

昭和52年度関東学生バドミントン選手権大会
長谷川、大塚が単・複を制す …… 34

◎トピックス／39

☆グラフ—実業団選手権から

表紙デザイン・構成＝野間デザイン室
表紙・本文写真＝赤星三樹

●男子団体

河崎ラケット、奇跡の大逆転

●斉藤、初優勝へ大殊勲

第27回全日本実業団バドミントン選手権大会は、6月17日～22日までの6日間、大阪・京都で盛大に開催された。

折りからのコレラ騒動のため欠場の憂き目をみたチームもあったが、各種目とも熱戦につぐ熱戦で成功裏に幕を閉じた。

地元の運営も万全で、特に京都では宿舎から会場まで、自衛隊の協力により専用バスが運行され、選手のコンディションづくりに一役買っていた。

なお、今大会はエリカラーシャツの着用が認められ、一段と大会に色を添えていた。

◆男子団体

▽準々決勝

電電東京　3―1　トヨタ自工
ヨネックススポーツ　3―1　関東自工

▽準決勝

河崎ラケット　3―0　スワロー化研
高岡市役所　3―0　電電北海道
電電東京　3―2　ヨネックススポーツ
河崎ラケット　3―1　高岡市役所

▽決勝

河崎ラケット　3―2　電電東京

斉藤・角田1―2池田・尾崎
銭谷・中井1―2田所・土田
斉藤　2―1　尾崎
銭谷　2―1　土田
中井　2―0　田所

（河崎ラケットは初優勝）

自軍ベンチも見放す

ダブルスを2―0とリードした電電東京の優勝は、ほぼ決定かと思われた。

最後に残ったシングルスの結果を待たずに、選手・役員の大半は、個人戦の開催地・京都で行われるレセプションへ向け、出発してしまった。

しかし、会場ではこれから、奇跡の逆転劇が始まろうとしていた。

斉藤と尾崎の、壮絶な闘いである。

両軍ベンチとも、すでに勝負あった面持ちで、のんびり試合を眺めている。

傍観する自軍ベンチを尻目に、斉藤は快調にとばす。尾崎のやや気の乗らないプレーに助けられて第1ゲームを奪取。

ベンチの士気が上がりかけると、今度は斉藤が自ら散慢なプレーで、それに水をかける。ついには、スタミナの消耗し切ったようなフットワークを見せはじめ、俄然調子を上げた尾崎の前に、なすすべもなくタイに持ち込まれてしまった。

ここで両軍ベンチも、観衆も、完全に勝敗の行く方を見たような表情になっていた。

むろん、それは仕方のないことだろう。

尾崎は海外遠征の経験もあり、押しも押されもせぬナショナルチームのメンバーなのだ。

かたや、斉藤は社会人になってめきめき力はつけているものの、全日本クラスの大会では、ベスト4はおろか、ベスト8にも、一度も顔を出したことはないのだ。

河崎ベンチでさえ「ここまでやれば大健闘」と考えたにちがいない。

もしこの時点で、尾崎の勝利を疑った者がいたとすれば、それは斉藤自身だっただろう。

ファイナルゲーム。周囲の冷ややかな視線を浴びながらも、鮮やかに変身した。

チャンスと見るや果敢に打ち、横転しながらも拾いまくる闘志に、徐々に尾崎の顔にアセリの色が出てくる。

捨て身で迫る斉藤のプレーに対し、尾崎の腕が萎縮してくる。

きわどいコーナーを突くスマッシュにミスが多くなるのと、尾崎が崩れるのは同時だった。

それでも懸命に反撃を試みる尾崎だったが、その時は、連戦の疲れで足にケイレンが走っていた。

劇的なドラマ

斉藤の勝利が決定した瞬間。それは河崎ラケット初優勝の一瞬といっても過言ではないだろう。

隣りのコートで同時に進行していた、銭谷対土田も、第一人者銭谷の前に土田のスタミナが切れ、第3シングルスに受け継がれた。

しかし、ここからはもう技量

の戦いではなかった。

両軍ベンチの声援も、表情がまるで逆転していた。

今まで一度も田所に勝ったことがないという中井は、新人らしくムードを反映するかのように、強気のプレーで押し切った。

ダブルスを二つ落として、絶体絶命のピンチから、見事逆転を成し遂げた河崎ラケットは、初優勝にふさわしいドラマを作り上げた。

今一歩のところで、通算5回目の優勝を逃がした電電東京だったが、準決勝のヨネックス戦に、心身ともに、全精力を使いはたした感があった。

その電電東京最後の試合を受け持った田所は、敗戦の中にあってもマナーを乱さず、後輩中井のシャトル交換の要求にも、心よく応じていたのは、その状況から考えて、実にすがすがしかった。

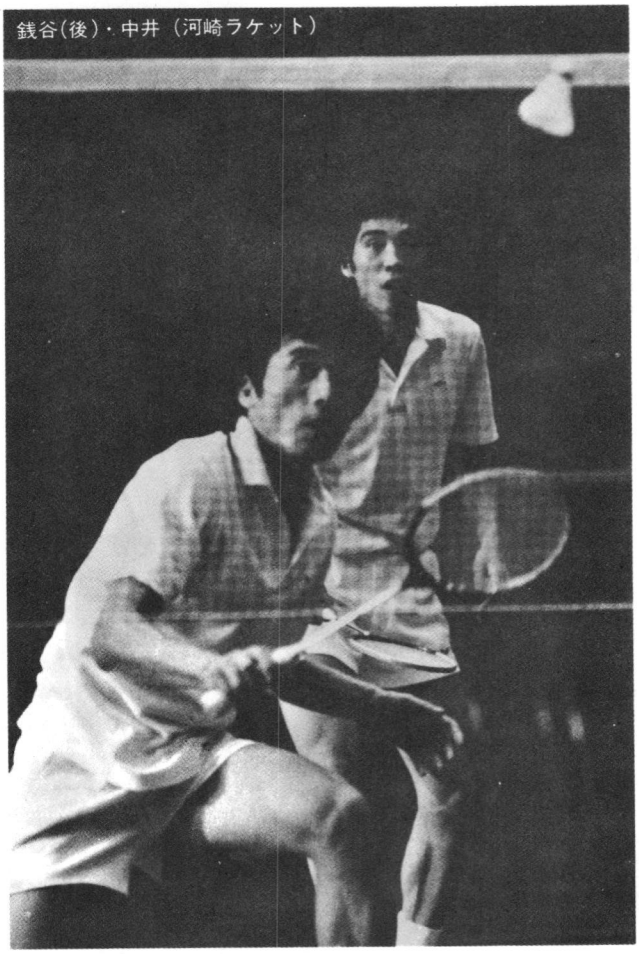
今大会不調だったが、好漢田所の復調に期待したい。

初優勝を飾った河崎ラケット・平井主将の喜びの声……斉藤が本当によくやってくれました。

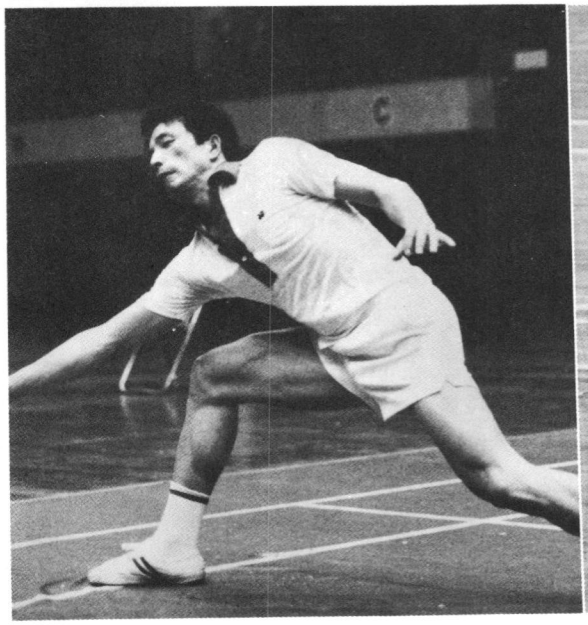
どんなことがあっても、勝負は最後まで諦めてはいけないということを、彼はあらためて教えてくれました。

ダブルスでも角田と組んで、池田・尾崎組から1ゲームを取り、結果的に尾崎の体力を消耗させました。これも大きかったですネ。

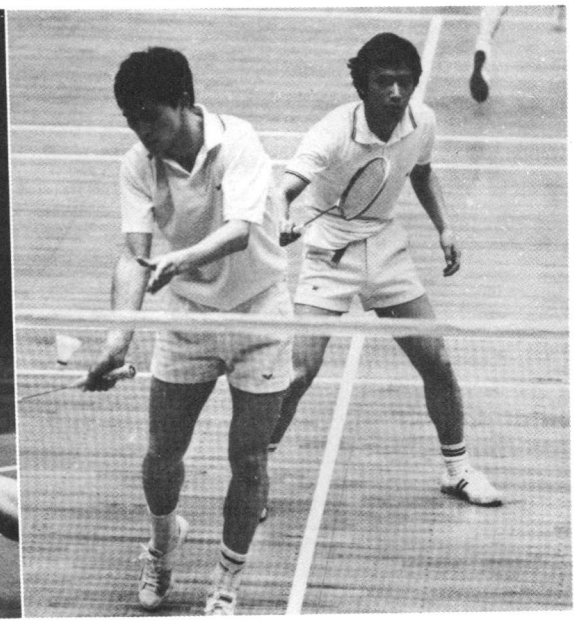
でも、優勝というのは気持のいいもんですネー。



銭谷(後)・中井（河崎ラケット）



尾崎（電電東京）



谷口(左)・磯野（トヨタ自工）

第27回全日本実業団選手権大会詳報

サントリー輝く2連覇

●女子団体

●カワサキの執念実らず

◆女子団体

▽準々決勝

サントリー 3—0 琴平電鉄

旭光学益子 3—2 電電東京

河崎ラケット 3—0 トヨタ自工

ヨネックススポーツ 3—0 北辰電機

▽準決勝

サントリー 3—0 旭光学益子

河崎ラケット 3—1 ヨネックススポーツ

▽決勝

サントリー 3—2 河崎ラケット

徳田・高田0—2湯木・池田

谷・秋本幸2—0千葉・渡辺

徳田 2—0 池田

高田 1—2 湯木

秋本八 2—1 千葉

（サントリーは2年連続2度目）

観衆と選手が一体

昨年と同じように、会場に駆けつけた応援団をバックに、決勝まで4試合すべて3—0で退けたサントリーと、新人千葉の加入で層の厚くなった河崎ラケットの対戦は、大方の予想どおりであった。

トップダブルスの湯木・池田対徳田・高田は、久し振りに池田に覇気があり、優勝への執着心が感じられる熱戦が繰り広げられた。

池田は、返されても返されても打ち続ける根気を見せ、湯木のリードに応える動きを見せた。

このダブルスを落としたら、優勝はあり得ない、必ず取らなければならないポイントという気持が池田を叱咤し続けていたようだ。

それに対し徳田・高田は、層の厚さを頼りにしてか、今一つ集中力がない。

終始湯木・池田がリードしたままゲームオーバーとなった。

第2ダブルスの千葉・渡辺も、第1ゲームよく頑張ったが、勝機をうかがうまでには至らず、千葉の体力をいたずらに消耗してしまった。

第1シングルス、徳田はダブルスで精魂を使い果たしたような池田を完全に封じ込んで、2—1と王手をかけた。

しかし、次の河崎のオーダーは湯木である。

団体戦優勝に想像以上の執念を燃やす湯木は、高田をファイナルゲームでは軽く一蹴して千葉へバトンタッチをした。

ケイレンに万事休す

さあ、最終シングルス、秋本（八）対千葉。ヤマ場である。

観衆も、大勢のサントリー応援団に対して、判官びいきの河崎側と、真っ二つに分かれて、応援合戦を始める。

秋本は、地元の盛大な応援がかえって災いしたのか、ずるずると凡ミスを重ねて8—10と、ゲームポイントを先取された。

しかし、ここから秋木（八）独特の、大きく引きつけて放つカットがフェイントとなって、千葉の動きがリズムを失い、あと1本をどうしても取ることができない。

効果的なカットを武器にして秋本（八）は、心理的にも優位に立ってセッティングに持ち込み、足の止まった千葉のフォアサイドにスマッシュを決めて、第1ゲームを先取した。

第2ゲームに入ると、今度は全く逆の展開になり、先にリードをとった秋本（八）が追われる格好となった。

追う者は伸び伸びと打ち、追われる者は腕が縮んで、立場はまた逆転してファイナルにもつれ込んでしまった。

こうなると結果は想像もつかない、体調を知る本人のみである。

ファイナルになると、どうやら第2ゲームで体力を消耗した千葉は、スピードがなくなり、一気に2—9のスコアに差が開き、懸命に打ち返そうとラウンド・ザ・ヘッド・ストロークの体勢をとったまま、その場にうずくまった。

両足のケイレンである。

すぐにタンカが運ばれて千葉は退場したが、団体戦の過酷なフィナーレだった。

この日、千葉は昼食時にも腹筋にケイレンがきていたという。

第2ダブルスでのハッスルぶりが、シングルスにも影響していたと見るのは、皮肉な観測であろうか。



徳田(後)・高田（サントリー）

午葉（河崎ラケット）

第27回全日本実業団選手権大会詳報

●一般男子シングルス

〝安泰〟銭谷、王座を守る

●〝銭谷時代〟いよいよ本物か

◆一般男子シングルス

▽準々決勝

銭谷（河崎ラケット）2（15—1 15—0）0 遠藤（電電北海道）

飯野（ヨネックス）2（15—5 15—11）0 尾崎（電電東京）

栂野尾（ヨネックス）2（15—0 15—12）0 今泉（高岡市役所）

土田（電電東京）2（15—12 15—5 12—15）1 笠井（関東自工）

▽準決勝

銭谷 2（15—10 15—0）0 飯野

土田 2（15—11 15—8）0 栂野尾

▽決勝

銭谷 2（15—12 15—3 16—17）1 土田

（銭谷は3年連続3度目）

逃がした魚は大きい

圧倒的な強さでファイナル進出を果たした銭谷に対し、病後の回復に手こずる土田は、悪戦苦闘の連続であった。

あわや〝大番狂わせ〟のシーンが、準々決勝・笠井戦において繰り広げられた。

好調の波にのる笠井は、土田のお株を奪うような速い攻撃に終始して、先手先手と攻めまくり、ファイナルゲームも一時は12—6とリードしたが、どうしても13ポイント目をあげることができず涙をのんだ。

結局、12ポイントから進まなかったのが、精神的な落ち着きを失わずに、勝ちをあせる笠井の凡ミスに乗じて逆転に成功した土田の強運というべきか、意地というべきか。

笠井にしてみれば、13ポイントを先に取っておけば、逆に土田のアセリを引き出すことができ、ベスト4入りの切符を手にしたも同然だったのだが、惜しいかなせっかくのサービスオーバーも、土田のネットインなどに阻まれたのは痛恨だった。

土田は、ベスト16入りでも同じサウスポーの九原（電電北海道）とセッティングをしており、比較的苦手としているのだろうか。

中国人〝飯野〟

シングルスでも銭谷、土田に迫る勢いのある飯野は、中国式バドミントンの三球目攻撃とも思える戦法をマスターしようとしているのか、果敢にジャンピングスマッシュ、バックハンド・ショートサービス、スピンの効いたヘアピンを駆使して、楽楽とベスト4へ名乗り出てきた。

特に、準々決勝の尾崎戦などは、今大会不調だったとはいえ、積極的に自分のパターンを作り出そうとするかのように攻撃を仕かけ、精彩のない尾崎を圧倒した。

バックハンドによるショートサービスの試みは、遠征の経験を生かした〝より速く〟〝より攻撃的に〟への挑戦か。ダブルスプレーヤーといわれながらも着実に力をつけてきた飯野の面目躍如だった。

しかし、対銭谷戦で見られたように、飯野のこれから打ち破っていかなければならない壁はまだまだ厚い。

互角、あるいはそれ以上のテクニックとスピードを持った相手に、これからどう対処していくか、シングルスにも成長著しい飯野の旺盛なファイトに期待したい。

栂野尾、若手に戻る？

ベスト4を、若手〝三羽烏〟が占める中で、ベテランとして一人気を吐いたのが栂野尾だった。

4回戦の対米（北陸コカコーラ）戦で、第1ゲームを失ったのに気を引き締めて、以後、5回戦の谷口、準々の今泉戦に0ゲームを演じる、抜群の集中力を見せた。

本人も大会前から「シングルスでも身体を痛めつけて、自分のためにも若手のためにも頑張りたい」ともらしていたように、期するところがあったようだ。

独特のネット前からの、フェイントの効いたストロークに速さがよみがえり、昨年のオールジャパン3位の谷口、新人中井（河崎ラケット）を一蹴して健在振りを示した今泉を完全に抑え込んだ。

体力的な復活より何より、若若しいファイトに賞讃の拍手を送りたい。

ややもすると老け込みがちに

なるベテランプレーヤーにとって大きな刺激になったのではないか。

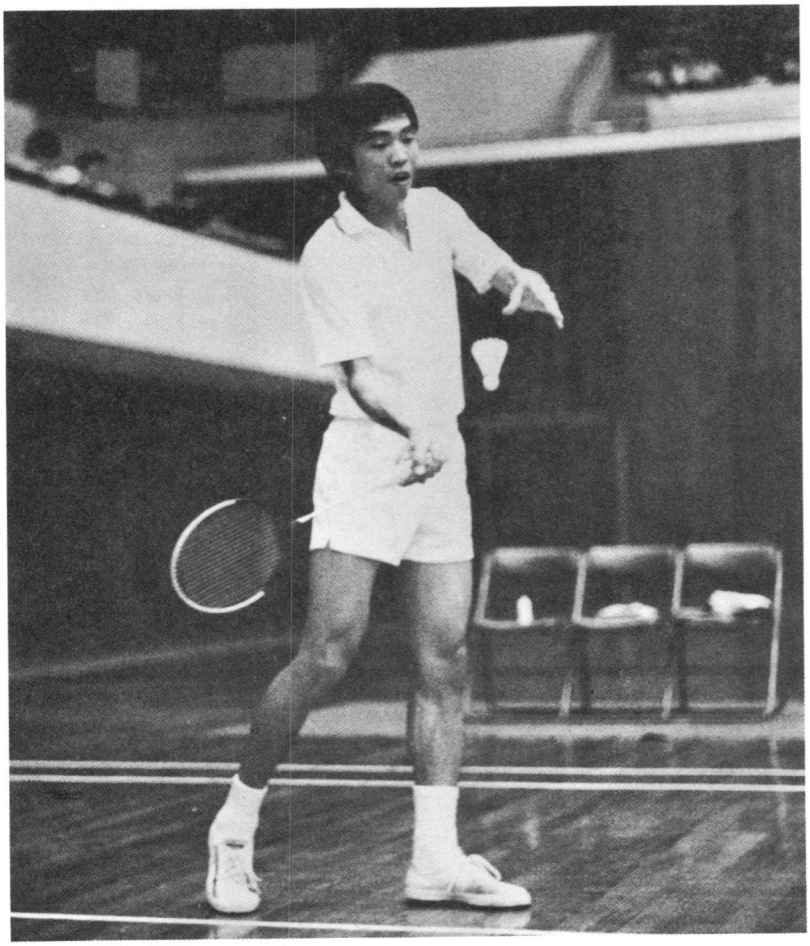
迫力70パーセント

決勝まで、唯一人余裕をもって勝ち進んだ銭谷は、やはり第一人者の貫禄十分。好調飯野に対しても力で押し切り、その底力を見せた。

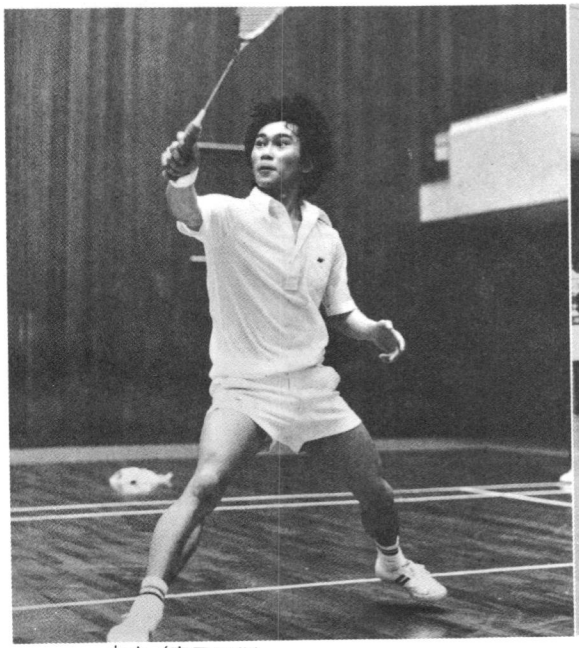
決勝は、次第に調子を取り戻してきた土田の速いリターンと、サウスポー独特のクロススカット、クロススマッシュが左右に冴え、高い位置からのスピンのかかったヘアピンで銭谷を追いつめ、ファイナルゲームもいったんは、10—6、11—8とリードをとった。

しかし、いつものような鋭角的な速攻があまり見られない銭谷だったが、一段と堅実味と幅を増したレシーブでこれをしのぎ、チャンスを待って破壊力のあるスマッシュに結びつけた。

今大会の銭谷は、ややまとまったプレーで、今までのようにスマッシュにつぐスマッシュといった迫力に欠けたのは寂しい気がする。



銭谷（河崎ラケット）



丸山（東屋製薬）



鈴木（三条機械）

●一般女子シングルス

神話くずれ、徳田初優勝

●会場騒然の興奮

◆一般女子シングルス

▽準々決勝

湯木（河崎ラケット）2 — 0 沼能（旭光学）
11—4, 11—2

高田（サントリー）2 — 1 秋本八（サントリー）
11—5, 1—11, 11—4

徳田（サントリー）2 — 0 千葉（河崎ラケット）
11—4, 11—2

池田（河崎ラケット）2 — 0 西尾（サントリー）
11—8, 11—2

▽準決勝

湯木 2 — 0 高田
11—1, 11—3

徳田 2 — 0 池田
11—4, 11—6

▽決勝

徳田 2 — 1 湯木
11—5, 6—11, 11—3

（徳田は初優勝）

その日がやってきた

「ヤッター!!」

優勝が決定した一瞬、徳田は跳び上って喜びを表現し、ラケットを投げ出してかけ寄り、握手を求めた。

チャンピオンになって以来、この大会でも6連勝と、国内では負け知らずの湯木にも、連勝のとだえる日がやってきた。

本人も半ば信じられないような、実感のわかないような複雑な表情も、握手に応じて帰り仕度を始めるころになると、次第に悔しさがこみ上げてくるのか、キッと唇を噛みしめるのを隠し切れなかった。

第1ゲームを失っても、誰が湯木の敗北を予想しただろうか。

「必ず湯木が逆転する」

「最後に笑うのは湯木だ」

誰もがそう思ったにちがいない。

そして過去において湯木は、それらの要求を満すように、筋書き通りのドラマの主役を演じてきた。

この日も、第2ゲームを簡単に奪い返して、誰もが「またか」という気持になっていたにちがいない。

ファイナルゲーム、徳田が前半をリードしてチェンジエンドしても、まだチャンピオンズ・トーナメントの再演を見るような、横綱が順当に勝利を飾るのを見る時に似た雰囲気に変りはなかった。

しかし、徳田が目のさめるようなスマッシュを、両サイドに鮮やかに叩きつけて、ノータッチの湯木をたじろがせ、9—3とした時、ムードは一変した。

会場は騒然となり、観衆がコートサイドへ接近する。

ラリー中の、水を打ったような静けさ。ラリー後のどよめき。

神話を望む声と、新しいドラマをこがれる声。

周囲の劇的な幕切れの期待より、結果はあっけなくついてしまった。

〝不調〟湯木

マッチポイントを数回逃がれ、2ポイント追いかけた湯木だったが、逆転するにはあまりにも前半に差が開いていた。

それまでにも、今大会の湯木は、団体戦の高田、シングルス5回戦の秋本（幸）のサントリー勢に、それぞれ1ゲームを取られており、かならずしも好調とはいえなかった。

全英、世界選手権と相次いだビッグイベントの蓄積された疲労か、連勝記録の人知れぬ負担か、遂に〝不覚の一敗〟を喫してしまった。

活躍するサントリー勢

5回戦で湯木と対戦した秋本（幸）は、小柄ながらバネの利いた体をいっぱいに使って、ゴムまりのように弾んでキレのいいストロークを放ち、攻撃して1ゲームを奪い取ったのは、出色のできばえだった。

中盤から、ややスタミナの消耗が目立ち、善戦にとどまってベスト8入りはならなかったが、シングルスでは久々の活躍だった。

サントリーは、徳田をはじめ、西尾、秋本（八）、高田と4選手をベスト8へ送り込み、団体戦優勝の、層の厚さをまざまざと見せつけた。

〝集中力〟抜群

特筆すべきは、やはり優勝した徳田であり、世界選手権ベスト8の実績と、日英対抗でのギスクス戦の勝利が大きな自信となっているようだ。

以前に比べ勝負への執着心に、

きびしさがうかがわれる。

決勝までの相手に、つけ入るスキを与えなかった集中力は、著しい進歩の跡だ。

技術的には、集中力が出てきたことによって、ネット前へのダッシュが速くなり、高い位置で球をとらえているのが目についた。

スマッシュも乱発がなく、じっくりと相手を揺さぶってからの〝一発〟が効果的だった。スマッシュの決定率が抜群だったのが、それを示している。

このまま簡単に引き下がるような湯木でもなく、これからの二人の対戦が非常に楽しみになってきた。

喜びの徳田敦子選手の声……2

ゲーム目を捨ててファイナルに賭けたのがよかったと思います。

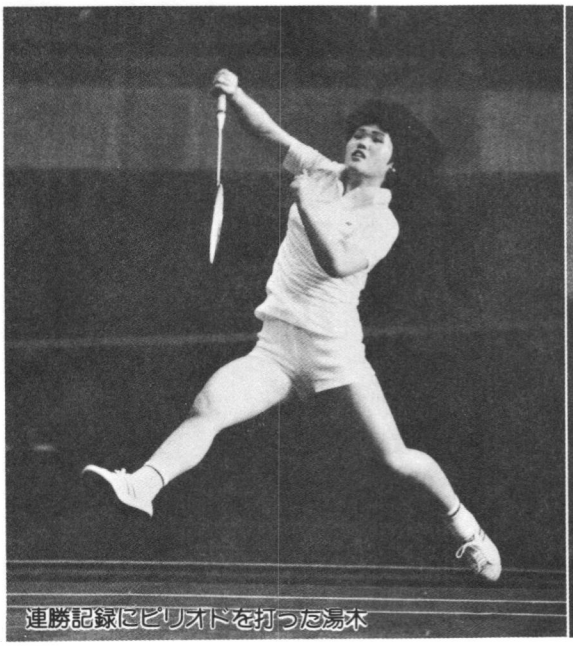
何しろ相手が湯木さんですから、最後まで勝てるとは思いませんでした。あわてずに、我慢したのがよかったと思います。

今日まで、湯木さんを倒すことだけを目標にしてきたので、とても嬉しいです。

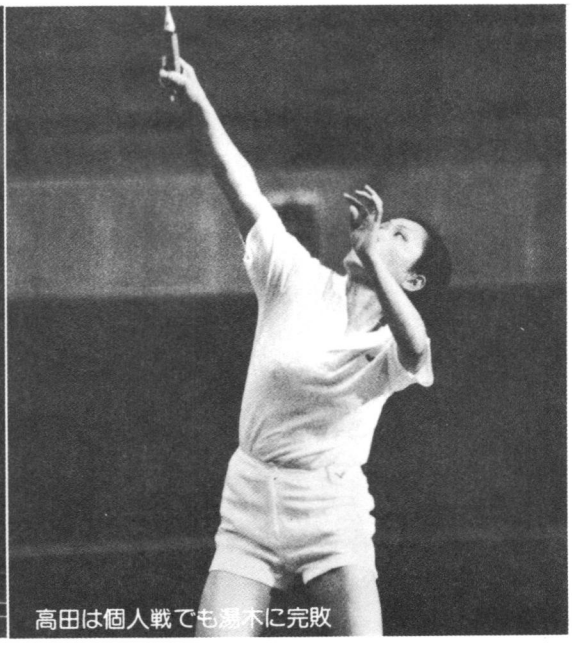
ファイナルの前に「クロ（愛称）、最後まで試合を捨てたらアカン!!」と声援してくれた言葉が、心の支えになりました。



思うぞんぶん動き回った徳田は念願の「打倒湯木」を果たす



連勝記録にピリオドを打った湯木



高田は個人戦でも湯木に完敗

第27回全日本実業団選手権大会詳報

●一般男子ダブルス

栂野尾・飯野組、堂々の3連勝

●団体戦の無念をダブルスで晴らす

◆一般男子ダブルス

▽準々決勝

栂野尾 飯野 (ヨネックス)	2	15—5 15—3	0	山崎 巽 (関東自工)	飯野 田所	2	15—7 15—8	0	田所 土田
土田 田所 (電電東京)	2	12—15 15—11 15—11	1	米沢 米原 (高岡市役所)	今泉 牧野	2	15—7 15—8	0	中井 銭谷 (河崎ラケット)
池田 尾崎 (電電東京)	2	15—9 14—17 15—8	1	谷口 磯野 (トヨタ自工)	今泉 牧野	2	18—16 10—15 15—10	1	池田 尾崎

▽準決勝

栂野尾 飯野	2	15—7 15—8	0	田所 土田	今泉 牧野	2	12—15 15—10 15—8	1	今泉 牧野

▽決勝

栂野尾・飯野は3年連続3度目（栂野尾・飯野）

ベスト4、昨年と同じ

バドミントンが、同じネット競技であるテニスや卓球よりも、〝番狂わせ〟というハプニングが少ないのは、一つの特徴であるが、それを裏書きするかのように、ベスト4に残ったのは、予想どおり昨年と同じ顔ぶれであった。

そのほかに、よく健闘したペアは、栂野尾・飯野から1ゲームを奪った井出・西島（富士フイルム）、田所・土田を最後まで苦しめた米沢・米原、池田・尾崎に肉迫した谷口・磯野などの進境が著しかった。

新ペアの銭谷・中井も旋風を巻き起こすには至らず、今泉・牧野戦では、うまい配球によって完封され、その破壊力あるスマッシュが〝宝の持ち腐れ〟となったのは惜しまれる。

楽しくスマッシュ

準決勝の栂野尾・飯野は、それぞれ田所・土田の大学の先輩でもあり、相手の手の内を知り尽しており、また田所・土田ともに体に〝キレ〟が見られず、迫力の乏しい試合になってしまった。

栂野尾・飯野は試合を重ねるごとに調子を上げ、スタミナ配分のむずかしいこの大会のコンディションづくりを、見事に乗り越えた。

今まで、スタミナに難点があるといわれ続けてきた飯野だが、今大会に関する限り、団体・個人戦を通じ、それらしい気配を見せなかったことは、これからに明かるい材料となるのではないか。体力に自信があったためか、苦しげに打っていた飯野のスマッシュを打つ表情が、楽しそうに感じられたのは気のせいばかりではないだろう。

池田、負傷には勝てず

反対の山、今泉・牧野対池田・尾崎は、一瞬のスキも許されない緊迫した好ゲームになった。

第1ゲーム、追いつ追われつ一進一退のままセッティングにもつれこんだが、決定的な強打を与えない今泉の低く沈むレシーブが、ボディそしてセンターを割る牧野のスマッシュを呼び、辛くもこのゲームをモノにした。

結果的にみて、この第1ゲームの明暗が、大きく勝敗を左右することになった。

池田・尾崎は、団体戦で肩を痛めてシングルスを棄権した池田の分を尾崎が背負う形になり、ローテーションにも変則的な動きが多くなり、第2ゲームこそ尾崎が打ちまくって取ったものの、ファイナルゲームで破綻をきたしたのは仕方がないかも知れない。

団体戦の汚名を晴らそうと、シングルスを捨て、ダブルス一本に賭けた名手池田の奮闘は悲壮感さえ漂わせたが、今は、肩の負傷が一日も早く癒えることを祈りたい。

〝いぶし銀〟今泉・牧野

強打の長身コンビ、栂野尾・飯野に、円熟味を増したベテラン今泉・牧野の顔合わせとなった決勝は、期待どおりの盛上がりを見せ、会場につめかけた地元の観衆をわかせた。

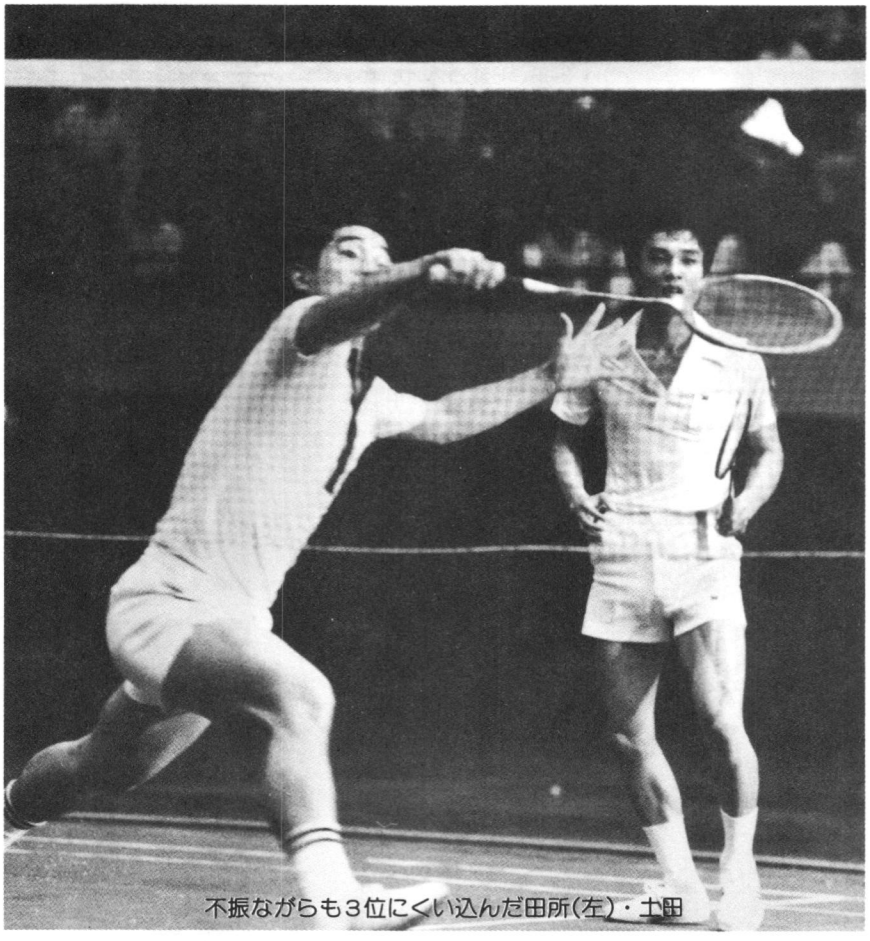
栂野尾・飯野は、両者とも威力あるスマッシュを持つ強味か、常に主導権を握って強打に徹し、今泉・牧野は、丁寧な継ぎ球を主体にして逆襲するという持ち味をいかんなく発揮して、互いに相譲らず、最後まで予断を許さない展開となった。

が、しかしその決着をつけたのは、技術でもコンビネーションでもなく、体力だった。

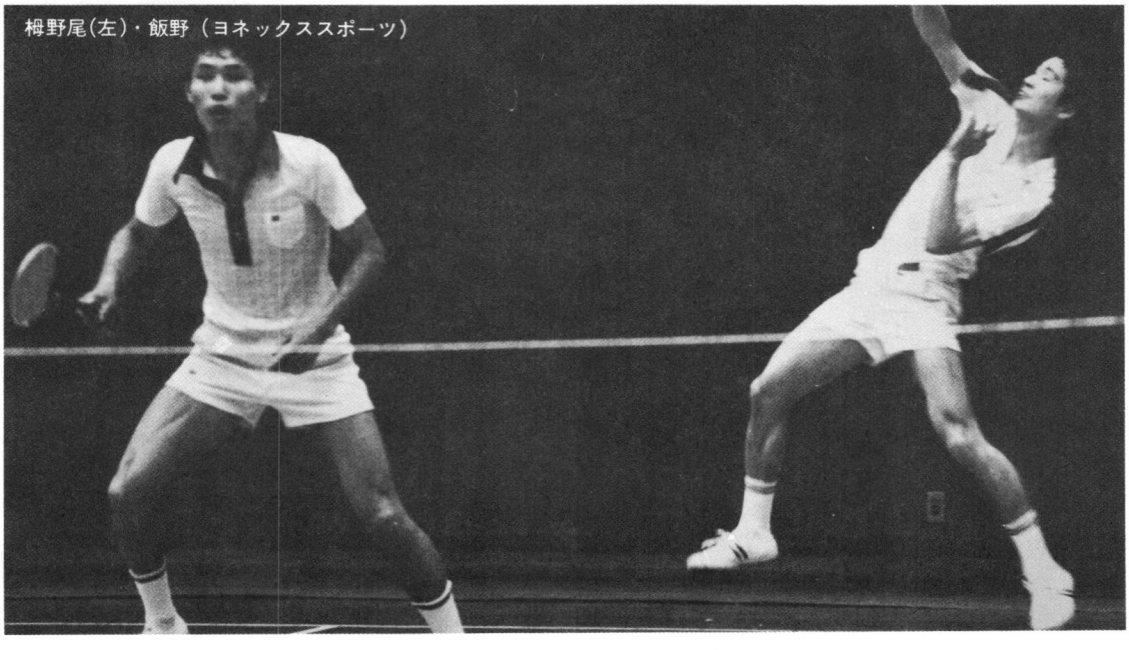
終盤、やっと苦労して追い上げにかかった7―9の時、きわどいジャッジを不利に判定された今泉・牧野は、せきを切ったように連続して4本ネットへひっかけて自滅した。

これは精神的な打撃にもよるのだろうが、それよりも、すでに、足が出ていなかったのはハッキリしていた。

敗れたとはいえ〝いぶし銀〟のような今泉の渋いプレーと、スナップの利いたクロススマッシュに独特な威力を持つ牧野とのコンビネーションの良さは、緻密なダブルスとしてひときわ異彩を放っていた。



不振ながらも3位にくい込んだ田所(左)・土田



梅野尾(左)・飯野（ヨネックススポーツ）

第27回全日本実業団選手権大会詳報

徳田、三冠目は高田の援護

●一般女子ダブルス

●楽しみなコンビ誕生

◆一般女子ダブルス

▽準々決勝

湯木　池田2（15—8　18—13）0　沼能　日向野（旭光学）

徳田　高田2（15—6　15—2）0　平井　山田（琴平電鉄）

谷　秋本幸2（15—8　15—1　8—15）1　石原　田所（琴平電鉄）

梅野尾　陣内2（15—8　15—12　3—15）1　西尾　秋本八（サントリー）

▽準決勝

徳田　高田2（15—8　7—15　15—11）1　湯木　池田

梅野尾　陣内2（15—11　15—5　9—15）0　谷　秋本幸

▽決勝

徳田　高田2（15—5　15—6）0　梅野尾　陣内

名門〝琴平〟復活か

まず、ベスト8へ進出した顔ぶれの中で、石原・田所の健闘を讃えたい。

ノーシードから勝ち抜いて、第4シードの池田・今田（電電東京）をストレートで下した僚友、平井・山田とともに、その奮戦はトーナメントを大いに盛り上げた。

これから第一線級プレーヤーとの対戦を多く経験すれば、さらに躍進が期待できる。

大都市へ選手達が集中する中、名門琴平電鉄の復活は頼もしい限りだ。

聞くところによると、今やエース的存在となった田所は、地元の高校時代にはベスト8にも入れなかったという。

それが昨年の国体では、谷・秋本（幸）を破り、今大会でも大いに苦しめたことは、恵まれない地方のプレーヤーも溜飲の下がる思いだろう。

団体戦の雪辱はたす

準決勝における二つの対戦は、それぞれに興味が大きかった。

徳田・高田対湯木・池田の争いは、力対力の激しいぶつかり合いが予想され、あるいは事実上の決勝になるかも知れず、殺気を含んだ熱っぽい試合になった。

湯木・池田は、最近いま一つ精彩のない池田のデキいかんにかかっていた。

滑り出し好調な徳田・高田は、スピーディな動きで相手を攪乱し、池田の凡ミスを誘発させて第1ゲームをモノにした。

しかし、動きに慣れた池田は、第2ゲームになるとエンジンがかかり、角度あるスマッシュをセンターに集めてタイとし、勝負をファイナルに持ち込んだ。

池田のスマッシュがセンターに決っている時の湯木組は強い。団体戦と同じ結果になるムードだった。

それでもファイナルゲームに入ると、徳田・高田がセンターへのスマッシュを拾い始める。池田もスマッシュを散らして、何とか決定打にしようとするが、よく拾うのに根負けしたように、次第にクリアーで返球する場面が多くなって、ここで勝負がついてしまった。

終盤、思い返したように打つスマッシュにも力がなく、サイドアウト、ネットアウトを重ねて、徳田・高田に凱歌が上った。

波にのると滅法強い湯木・池田だが〝試合をしてみなければわからない〟ではふがいない。

梅野尾、自在のペア

もう一つの準決勝、梅野尾・陣内対谷・秋本（幸）は、リードオフマンとしての梅野尾に視線が注がれた。

やや決め手に劣る梅野尾・陣内だけに、なおいっそう梅野尾のコンビネーションづくりが焦点となった。

期待に応えるように梅野尾は、谷の強打をドライブぎみの切り返しでかわし、連打をさけて、決定的なチャンスを与えなかった。

それに引きずられるように、陣内も持ち前のレシーブ力を発揮して、非力な弱点をうまくカバーした。

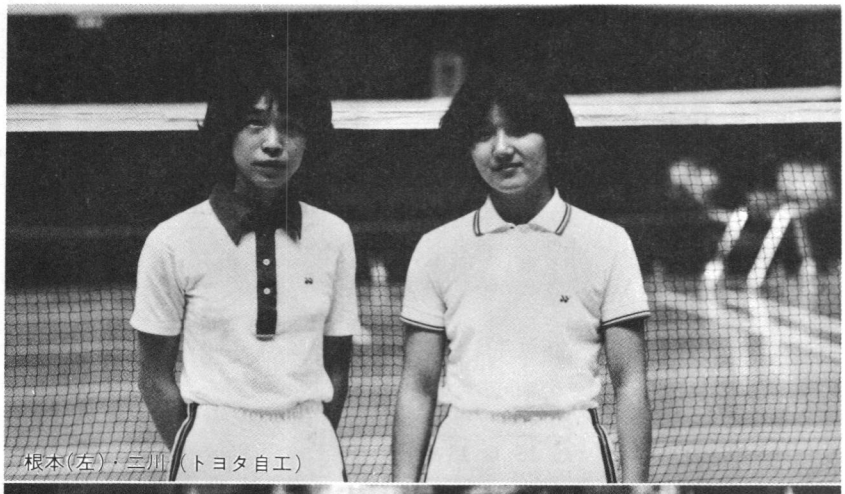
梅野尾・陣内は、準々決勝の西尾・秋本（八）戦で、すでにその戦法を見つけていた。

西尾・秋本（八）に、あっさり第1ゲームを取られたが、そこで互角の打合いが無謀なことに気づいた梅野尾は、攻撃にも抑揚をつけ、レシーブにも変化を持たせて成功。非力なペアの

パターンを十分に記憶して、それを唯一の活路として準決勝を乗り切った。

昇り竜の勢い

しかし、勢いに乗る徳田・高田は、その老かいな作戦を上回るスピードを持っていた。

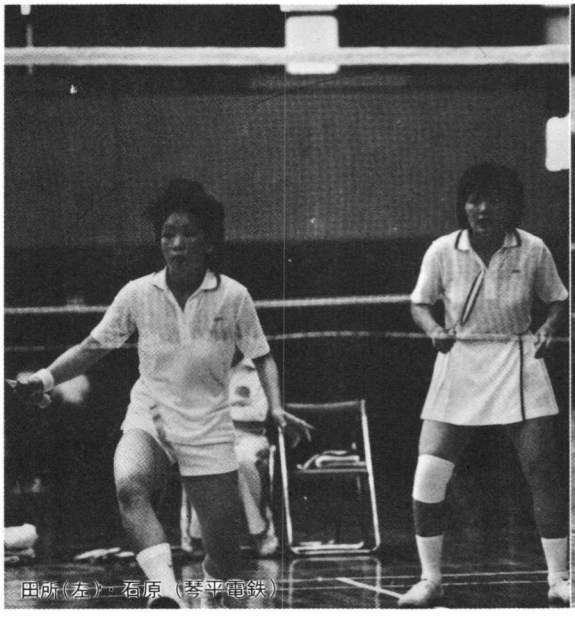

根本(左)・三川(トヨタ自工)

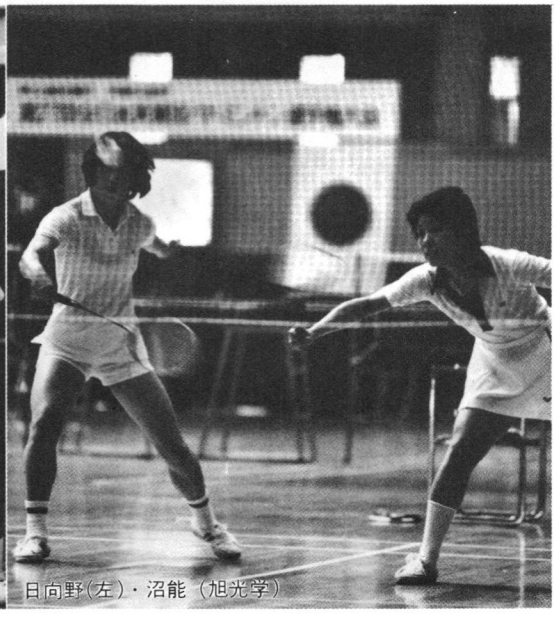

西尾(左)・秋本(八)(サントリー)

スピード対テクニックの対戦となった決勝だったが、走り込んだ体力から放つストロークに、梅野尾・陣内の足がついていかなかった。

湯木・池田を破って、さらに自信という武器を得た徳田・高田は、決勝のプレッシャーなど微塵もなく、伸び伸びと力強く動き回っていた。

社会人2年生で余裕の出てきた徳田と、度胸の良い新人高田の新しいチャンピオンの誕生は、コマ不足に悩む、ユーバー杯奪還への貴重な戦力となりそうだ。


田所(左)・石原(琴平電鉄)


日向野(左)・沼能(旭光学)

第27回全日本実業団選手権大会詳報

遠藤(単)、岡崎・飴谷(複)に栄冠

●40歳以上男子シングルス・ダブルス

◆40歳以上男子シングルス

▽準々決勝

遠藤（日本鋼管）2 — 15-15, 15-6 — 0 浜中（丸善石油）

高橋（いすゞ）2 — 15-9, 15-15, 15-10 — 1 山本（サンスポーツ）

原（小松製作所）2 — 15-13, 18-15, 15-10 — 1 大道（日立）

堺（十条製紙）2 — 15-15, 15-4 — 0 榎森（日本鋼管）

▽準決勝

遠藤 2 — 15-15, 15-7 — 0 高橋

堺 2 — 15-15, 15-9 — 0 原

▽決勝

遠藤 2 — 15-15, 15-6, 9-0 — 0 堺

（遠藤は2連勝2度目）

◆40歳以上男子ダブルス

伊藤（鬼頭）2 — 5-15, 15-12, 15-5 — 1 榎森（日本鋼管）原

井原（佐々木）2 — 6-15, 15-10, 15-10 — 1 中村（小松製作所）

谷口（吉上）2 — 15-18, 15-10 — 0 中島（クラレ）高谷（川崎重工）

岡崎（飴谷）2 — 9-15, 15-11, 15-8 — 1 曽根（日本火災海上）梅枝（国病）

▽準決勝

伊藤（鬼頭）2 — 15-12, 15-9 — 0 井原（佐々木）

岡崎（飴谷）2 — 18-15, 5-15, 18-15 — 1 谷口（吉上）

▽決勝

岡崎（飴谷）2 — 15-12, 15-8 — 0 伊藤（鬼頭）

（岡崎・飴谷は初優勝）

巨体がスタミナ源

岡崎・飴谷は、ともに巨漢のコンビであり、準々、準決と続いたファイナルゲームの疲労から体力が心配された。

しかし、決勝になってもマイペースを崩さず、互いに声をかけ合いながら助け合い、初優勝をものにした。

伊藤・鬼頭も、前半は主導権を握ってリードしたが、転んでも拾う岡崎・飴谷の前に兜を脱いだ。

◆30歳以上男子シングルス

渡辺（横浜市役所）2 — 15-15, 15-4 — 0 早川（日立）

増井（三菱化成）2 — 15-15, 15-3 — 0 大野（十条製紙）



戦い終えて日が暮れて…ホッとひと息の40歳ダブルスの入賞者

第27回全日本実業団選手権大会詳報

●30歳以上男子シングルス・ダブルス

渡辺(単)、森谷・星野(複)が優勝

竹俣（東京都庁）2 — 吉田（日農通信）1
15-15 15-14 17-13 1-15

鈴木（三菱重工）2 — 山本（福井市役所）0
15-1 15-4

▽準決勝

渡辺 2 — 0 増井
15-11 15-6

鈴木 2 — 1 竹俣
15-2 12-15 15-5

▽決勝

渡辺 2 — 0 鈴木
15-9 15-6

（渡辺は2年連続2度目）

余裕の逃げ切り

渡辺の安定した優勝だった。3年連続の決勝での対決。過去1勝1敗の戦績から接戦が予想されたが、鈴木に疲れが目立ち、動きが重く終始振り回されて、勝機をつかめなかった。

渡辺は、軽いフットワークからフェイントのかかったクリアーとカットを有効に使って、ピンチらしいピンチを招かず、危げない勝ち方だった。

◆30歳以上男子ダブルス

▽準々決勝

春武宮原（日田市役所）2 — 0 京屋斉藤（日本石油）
15-12 15-7

友金来田（神戸製鋼）2 — 1 増井小林（三菱化成）
15-5 5-15 15-12

森谷星野（電電東京）2 — 0 早川福田（日立）
15-5 15-6

藤原上野（三井造船）2 — 0 林宮岡（山陽国策）
15-3 18-13

▽準決勝

春武宮原 2（キケン）0 友金
15-11 14-18 15-11

森谷星野 2 — 1 藤原上野
15-7 15-10 8-15

（森谷・星野は初優勝）

後半が勝負

3連勝を狙う春武・宮原は、前半やや弱気だった森谷・星野のミスをついてリードしたが、勝ちを意識したのか、中盤から神経質な凡ミスを繰り返し、森谷・星野を立ち直らせてしまった。

後半、勢いにのった森谷・星野は、常に先手を取って攻撃の手をゆるめず、一気に押し切って初優勝を飾った。

▽決勝

森谷星野 2 — 1 春武宮原
15-7 15-10 8-15


30歳シングルスに堂々2連勝の渡辺

●第27回全日本実業団選手権大会詳報

●混合ダブルス

日下・牛田組、余裕の独り旅

●2位には新婚直前の〝熱いペア〟

◆混合ダブルス

▽準々決勝

日下 牛田 2 (15—0 15—1) 0 八川 中川（不二越）

（百十四銀行） 野本 清水 2 (15—3 15—5) 0 黒崎 鈴木（北辰電機）

（電電東京） 菅原 我妻 2 (15—4 15—7) 0 藤平 越川（KD）

（ヨネックス） 鈴木 中鉢 2 (15—10 15—4) 0 古明地 穐山（東京簡保）

（電電東京）

▽準決勝

日下 牛田 2 (15—4 15—12) 0 野本 清水

菅原 我妻 2 (18—16 15—5) 0 鈴木 中鉢

▽決勝

日下 牛田 2 (15—1 15—4) 0 菅原 我妻

（日下・牛田は初優勝）

全日本総合へ〝期待〟

今大会から、個人戦エントリーが2種目と制限されたため、やや寂しい顔ぶれとなったが、その中にあって日下・牛田のペアは抜群の強さをみせ、他の追随を許さなかった。

昨年の社会人大会で、梅野尾夫妻を相手に、ファイナルのセッティングまで追いつめた実力から見れば当然といえよう。

攻撃力、レシーブ力ともにミックスダブルスとしての型を持っており、今年はぜひ、オールジャパンに出場して、大暴れしてもらいたい。

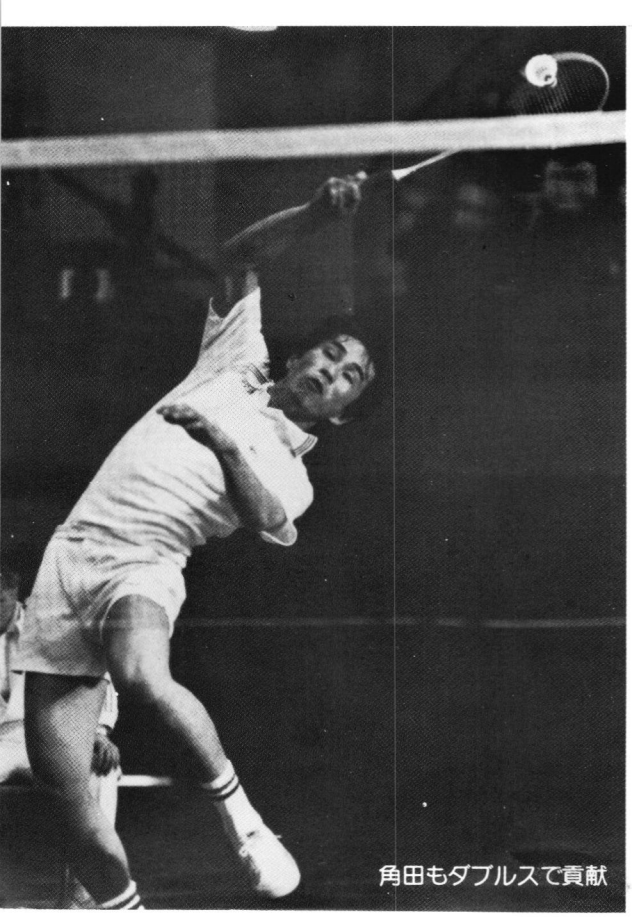
2位となった菅原・我妻のペアは、大会後に挙式が予定されているとか……。記念すべき日に花を添え、ミックスダブルスらしい話題を提供してくれた。



コンビネーションがモノをいいます。

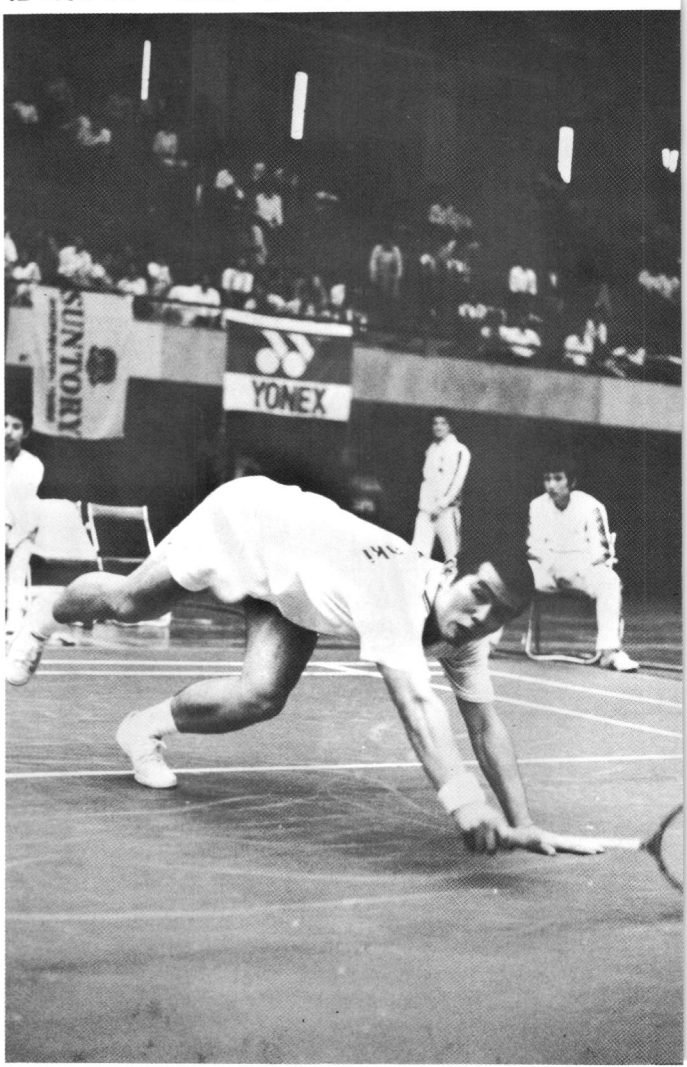
初優勝の河崎ラケットチーム

男子団体



角田もダブルスで貢献

捨て身のプレーで優勝へ導いた斉藤



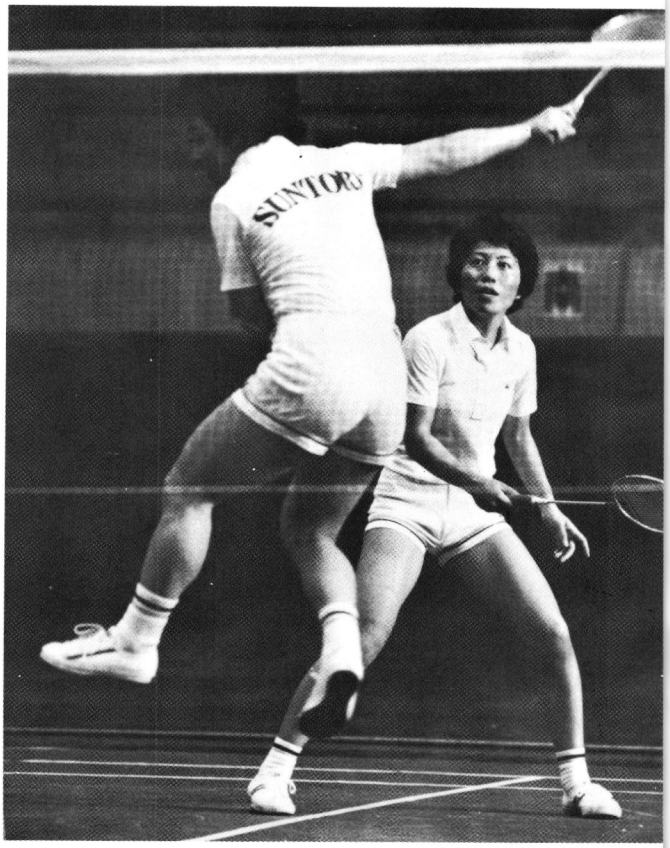
女子団体



2連勝をなしとげたサントリーチーム



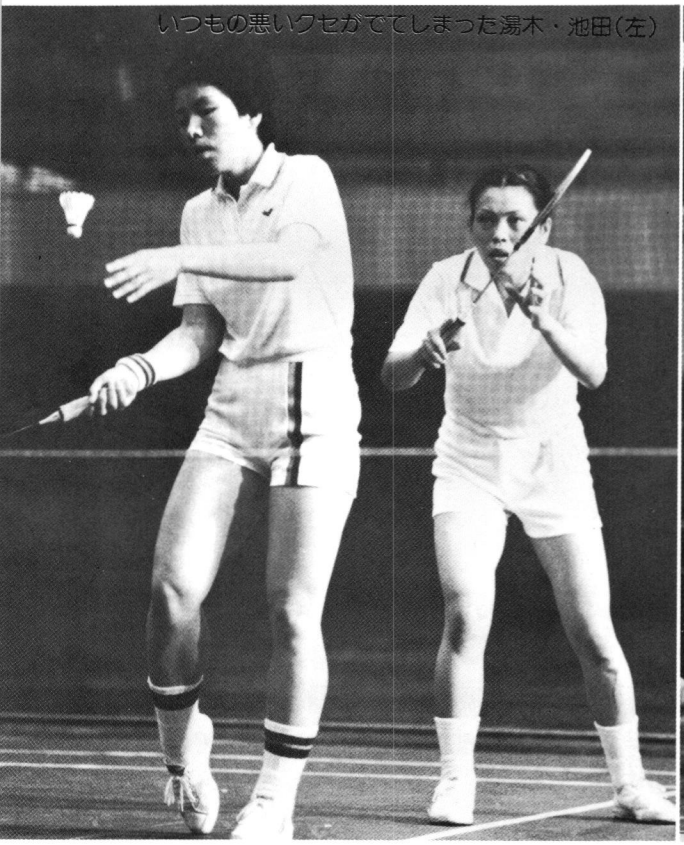
秋本(八)は正念場で貴重なポイント



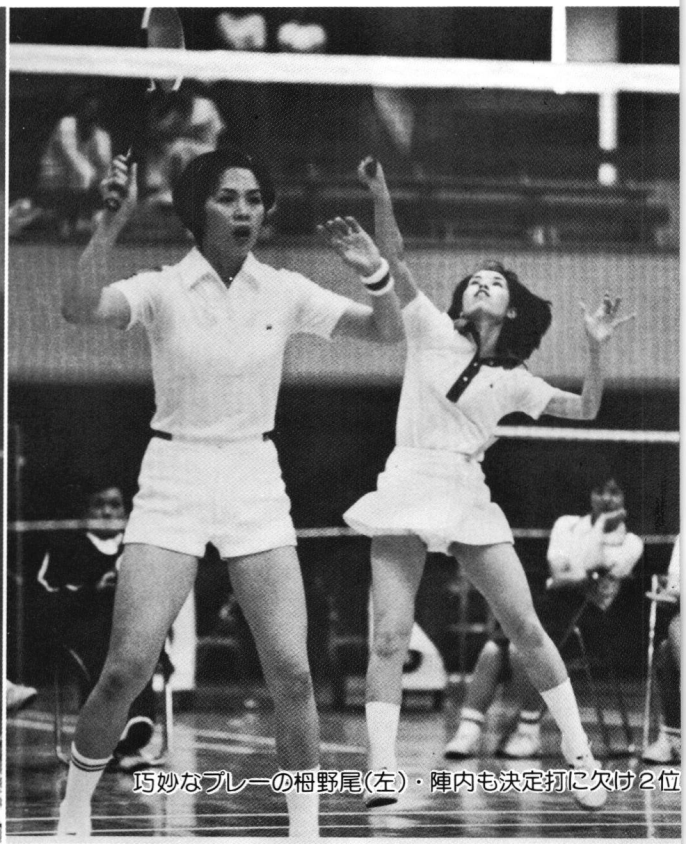
コンビの良さを発揮した秋本(幸)・谷(右)

女子ダブルス

気力あふれるプレーをくり広げた高田(左)・徳田



いつもの悪いクセがでてしまった湯木・池田(左)



巧妙なプレーの柑野尾(左)・陣内も決定打に欠け2位



ON RACKET

W

das®

®

お求めはこの看板のお店で

製造業者 KG 兼松江商株式会社 発売元 KSG 兼松スポーツ用品株式会社

〒532 大阪市淀川区木川東2-5-3 ☎06-305-1431
〒101 東京都千代田区内神田1-11-13(橋本ビル) ☎03-295-5611

バランスの良さ。なじむグリップ。この軽さ。
デビューが待たれたadidas®の1本1本。

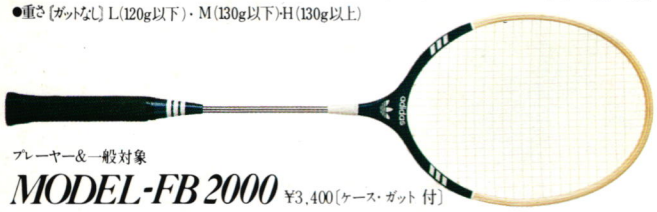
スポーツシューズを始め、スポーティンググッズの幅広い分野で今や世界を独走するadidas®。そのスポーツを知りぬいたadidas®から、いよいよ、バドミントンラケットが待望久しいデビューです。素材の持ち味をくまなく生かした各パーツ。バドミントンを徹底科学した機能的なフォーム。もちろん一流プレーヤーの『ここをこうしたい』という熱望をすみずみに取り入れての登場です。パワーとテクニックを見事に両立させた最新鋭の1本1本。いち早く馴染むのがライバルを泣かせる秘訣。



トッププレーヤー対象

MODEL-FB 1000 ¥5,400〔ケース付・ガット別〕

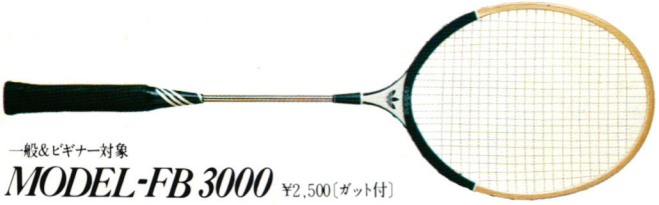
⊙テーパードシャフト 先細・手元太でロングなシャフト。思いきり振りきれ、豪快しい球離れが特長です。⊙フレーム 柔軟性と剛性をあわせもった合板フレーム。ガットが張りやすく、同時にガット張りによる変形がないのが決め手です。素材は特に厳選された高級木質材。⊙グリップ 手にしっくりと馴染む高級牛皮グリップ。 ●グリップサイズ G2(太)・G3(中)・G4(細) ●重さ〔ガットなし〕L(120g以下)・M(130g以下)・H(130g以上)



プレーヤー&一般対象

MODEL-FB 2000 ¥3,400〔ケース・ガット 付〕

⊙ストレートスティールシャフト ⊙フレーム やはり強度と柔かさを兼ねそなえた合板フレーム。吟味された高級材質の堅さがラケットの変形を防ぎます ⊙グリップ 牛皮を使用し触感、密着感に優れています。● グリップサイズ G3のみ ●重さMのみ



一般&ビギナー対象

MODEL-FB 3000 ¥2,500〔ガット付〕

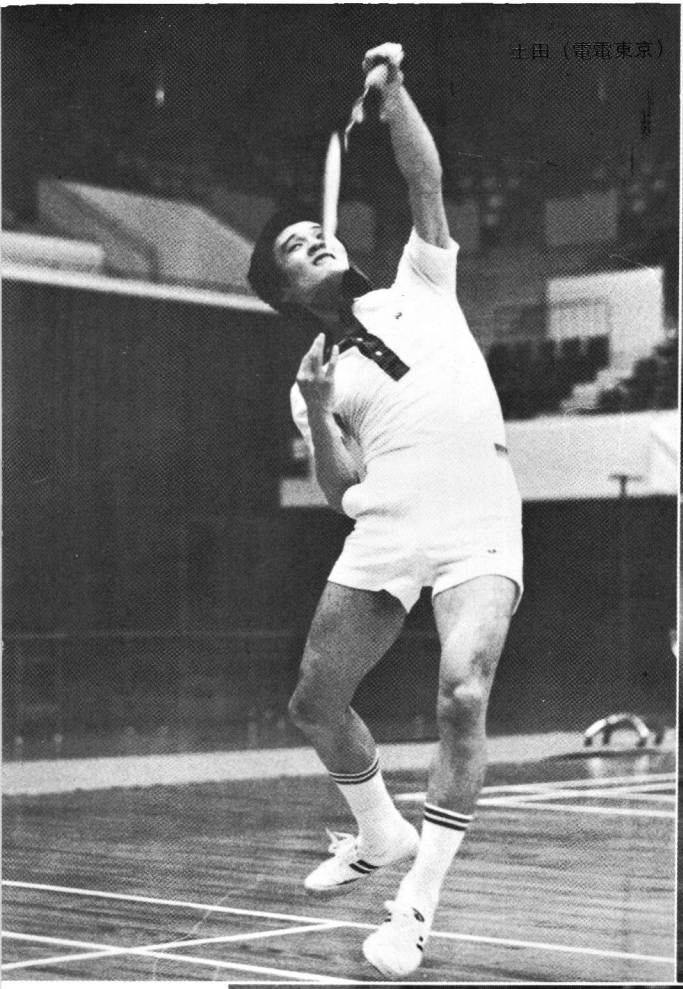
⊙ストレートスティールシャフト ⊙フレーム 丹念にセレクトされた木質素材の合板フレームで強度を確保しました。⊙グリップ グリップには手に馴染みの良い牛皮を使用 ●グリップサイズG3のみ ●重さMのみ

BADMINT

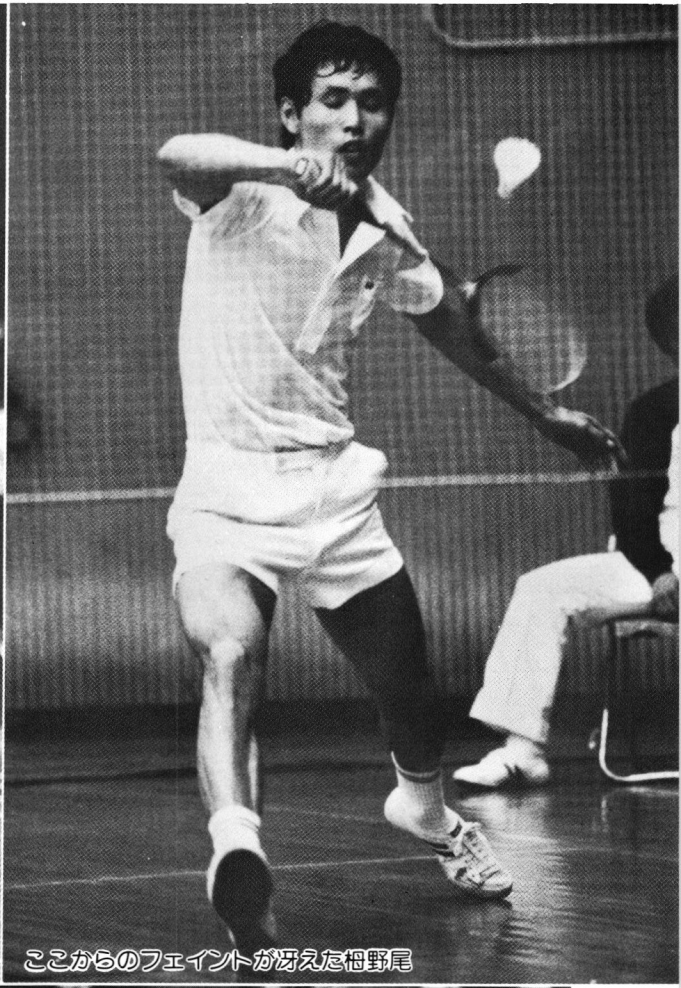
NE

adi

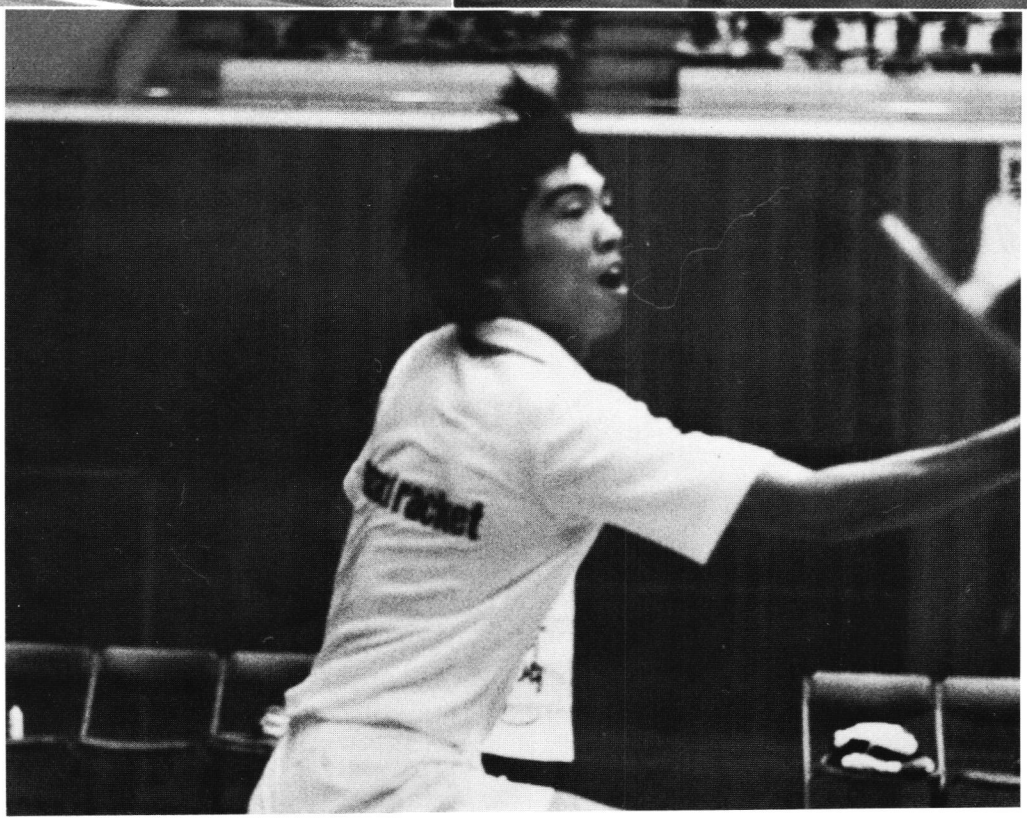
MADE UNDER ADIDAS LICENSE



土田（電電東京）

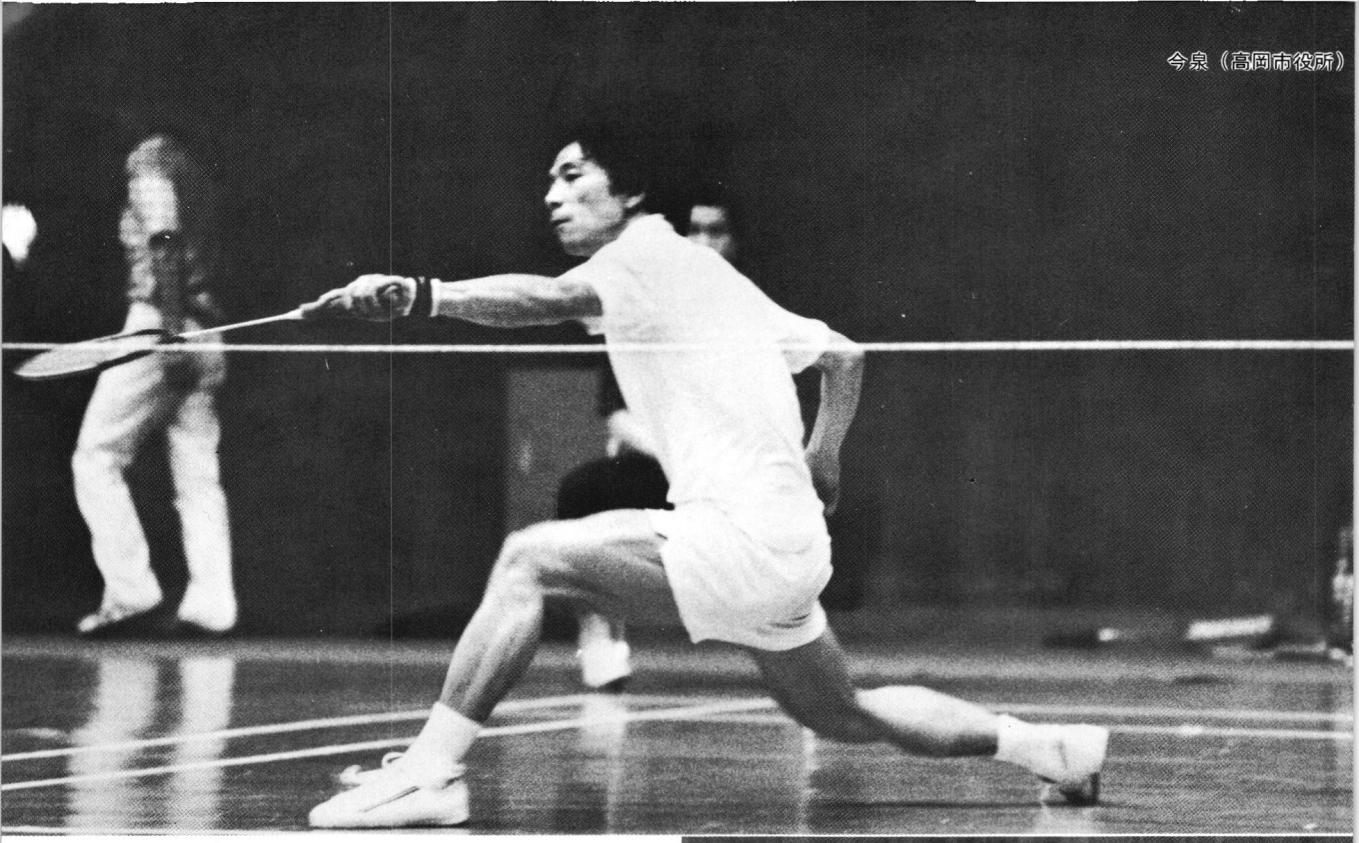


ここからのフェイントが冴えた柏野尾

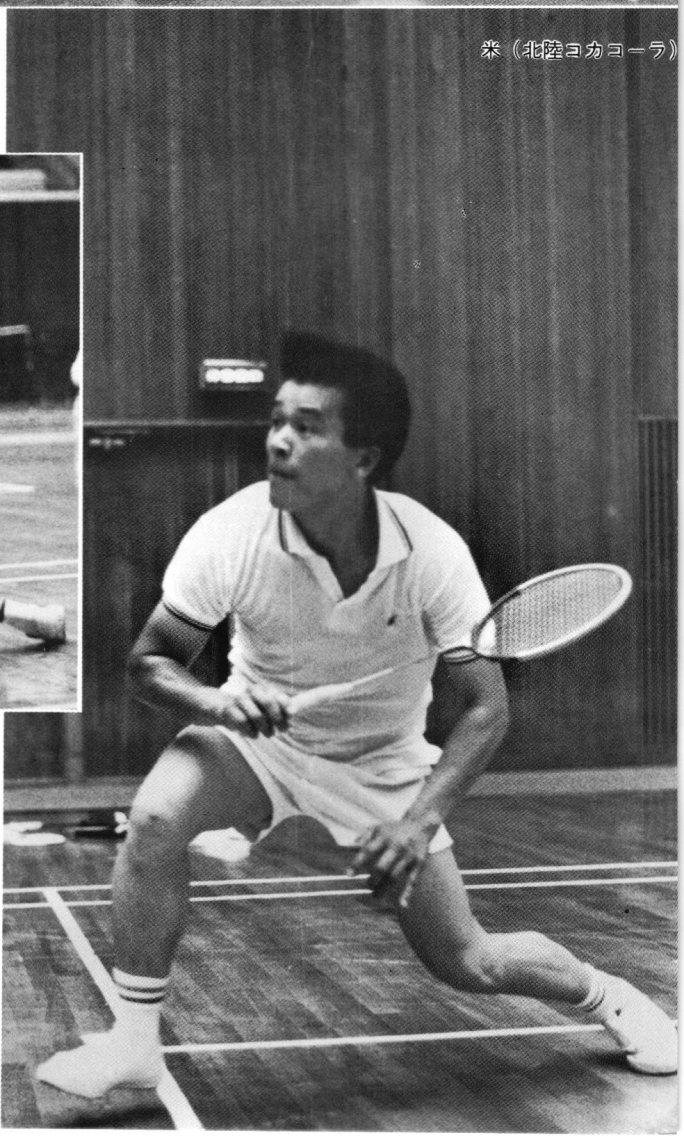


風格もでてきた銭谷はピンチにもあわてず

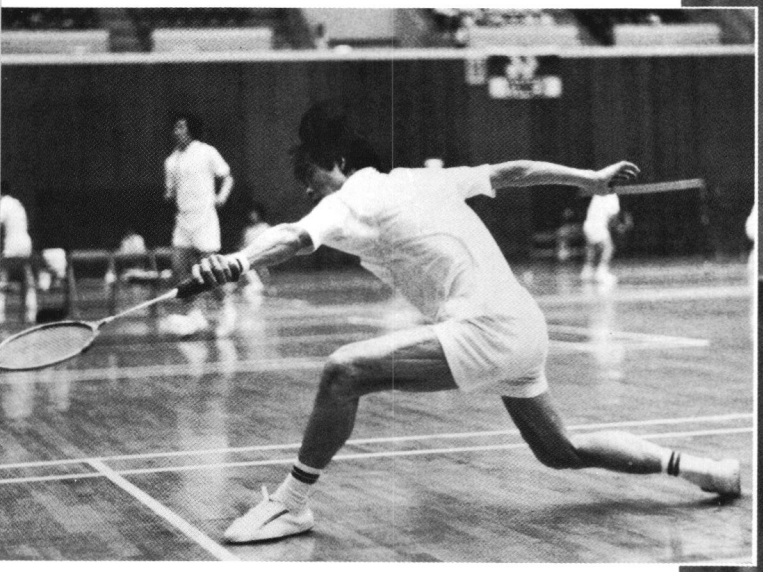
男子シングルス



今泉（高岡市役所）

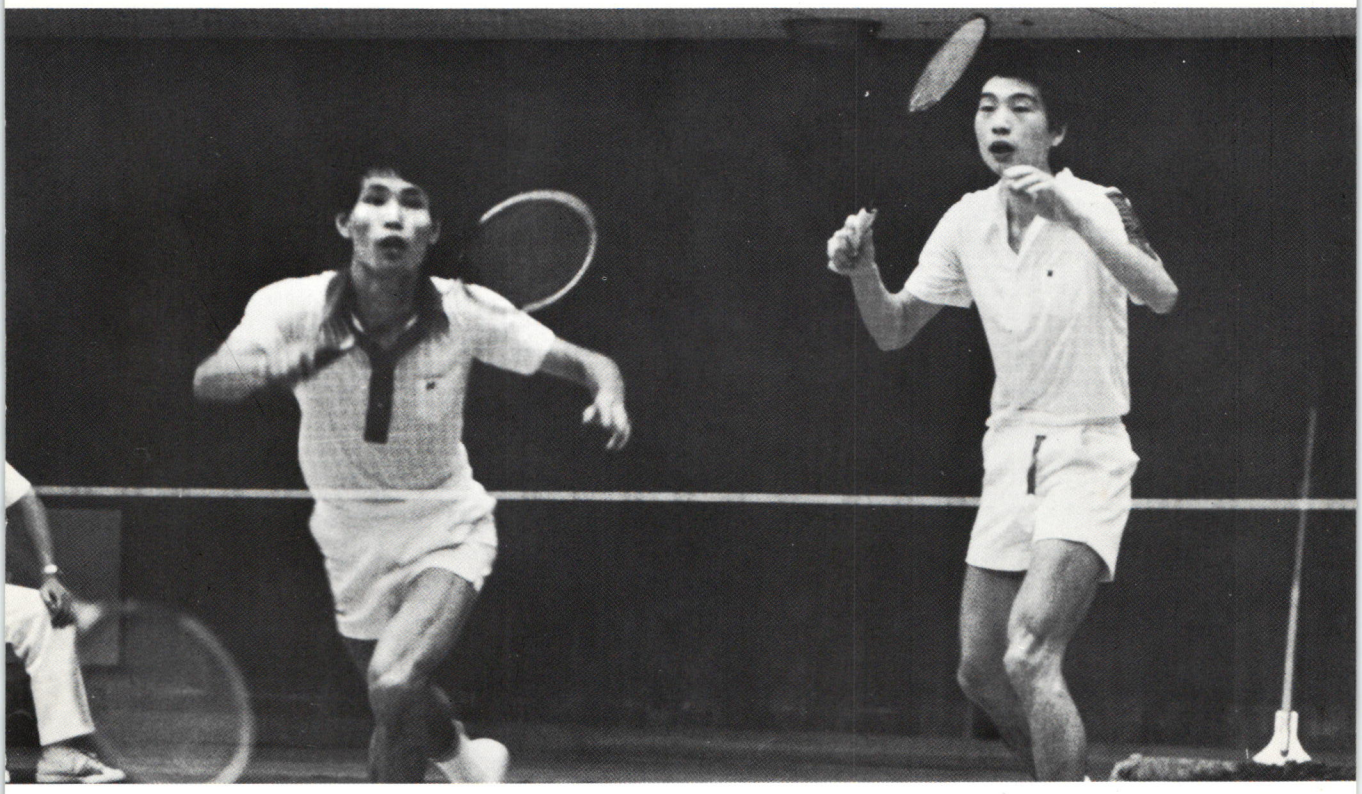


米（北陸コカコーラ）



軽快なプレーの笠井はベスト４へもうひと息

長身の利を生かして攻撃に徹した柵野尾(左)・飯野



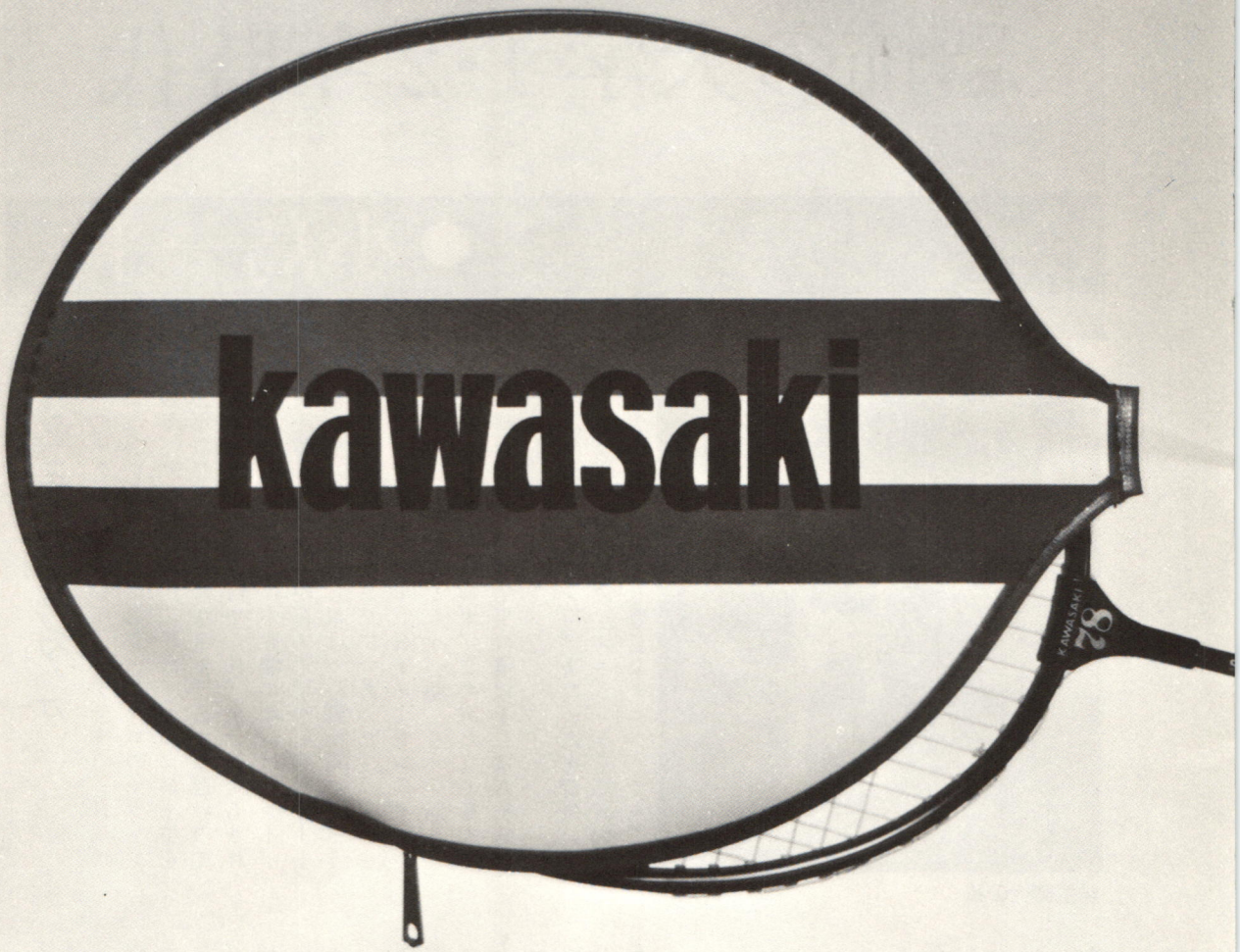
男子ダブルス

牧野(左)の強打と今泉の渋さで優勝へあと一歩



カワサキラケット
河崎ラケット工業株式会社

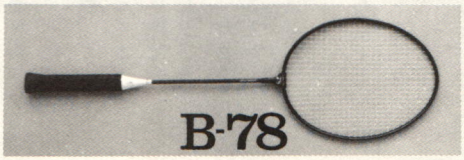
ドラマが始まる。



世界が燃える。

イギリス、デンマーク、インドネシア…
世界のコートで実力を発揮し、活躍するカワサキ。
数々の勝利のドラマを生み、
トッププレーヤに注目され続けています。

アルミ、クロームモリブデン、アルミ合金ダイカストを採用。
それぞれの特性を充分いかした軽く、弾力性豊かな新製品です。



No.B-78/セブンエイト/モスグリーン(アルミフレーム)
フレーム価格6,000円(ケース付)

㊐ガッツ小島の体当り実戦教室――4

恐怖の大学1・2年時代

●小島一平

"シゴキ"か"ビンタ"か

クリクリ坊主になり、まず恐怖の一日三時間のトレーニングに参加。10キロのマラソン競争、私は長距離が苦手で、つねに最下位を必死の形相で走るありさま。あまり遅いので常にペナルティを科せられ、余分に走らされた。その後ただちに中距離の組分けリレー。長距離も辛いが、四百メートル、八百メートルの全力疾走の苦しさは、心臓が止まりそうになったこともたびたびであった。

そして百メートル、五十メートルのダッシュ、これも遅れるともう一回、もう一回と、とどまることを知らず、このあたりでもうバテバテ。そして四年生の倍以上しぼられるのである。

次は土手のダッシュ、また一人を背負い土手を登り、階段のダッシュと、よくまあ次から次へと質、量とも豊富なメニューである。



学生時代の私

必ず二、三人が足のけいれんを起こす。前方のウサギ、バックウサギ、アヒル、ノミなど、もうここまでくると、一年生などは夢遊病者のごとくにふらふら。上級生の叱咤激励の声にも元気がでず、ついに鉄けん制裁となる。やっとたたかれて、なぜか気持ちがシャンとすると同時に、この野郎という気持ちが強くなり、馬力が出るのである。しめくくりは、腹筋、背筋、腕立て伏せで終了するのである。

全員整列、四年生の説教、ここで運が悪いとまた一発たたかれ、多い時には二、三発。四年生が引き上げると、三年生が説教、そして二年生が、とさらにひどい時はここでまたたたかれ、顔は赤くなる。しかし一年生は、たたかれてもそれですむ方がよほどましだと思ったものである。なぜかというと「おまえらたるんどる。もう10キロ走れ」またウサギなどということになると、それこそ真っ青なわけだ。

こうしてこのトレーニングが一ヵ月近くも続く。休みは週一回だから、雨乞いをする始末で、朝、雨が降りそうものなら、泣いて喜ぶほどだった。それくらい苦しかったわけである。

それが二年生ともなると、雨など関係なくずぶぬれになっても走る意欲が出たのだからおもしろいものである。今考えてみると、あの一ヵ月のトレーニングで、どれだけ体力がついたことか計り知れない。上級生の愛のムチには、後日になると感謝の念に変わった。

合宿はこの世の地獄

そして、春の合宿、忘れもしない平塚の見付台体育館。六時起床、砂浜でのトレーニングで約四十分。足が取られてのダッシュ、ウサギは、この世の地獄である。

九時から十二時、体育館で前半の三日間、基本練習だけのメニューがスタートする。なにせクリアーとかドロップはまだ良いが、スマッシュの基本練習はバテバテで、腕が折れるほど、打ちまくった。

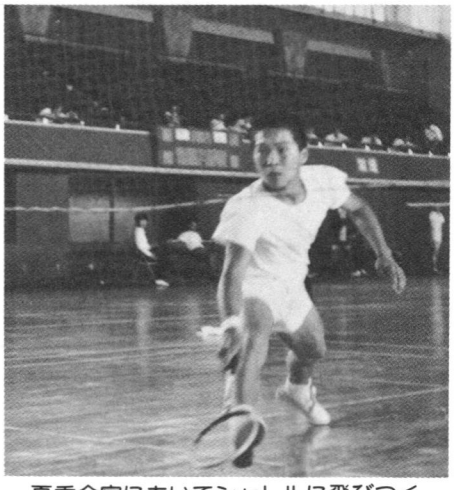
午後は、二時から五時だが、ここで特訓と称し、ピックアップされた五、六人は、昼休み、宿に戻らずおにぎりを持参し、三十分の食事の後、二時まで練習するのである。これも辛いの一言につきた。基本練習の三日間は非常に長く感じられ、シングルス、ダブルスの練習の待ち遠しかったことを覚えている。

この頃のリーグ戦は、三複六単の計九試合で、レギュラー争いが熾烈で、私はやっと第六シングルスに出場できることになったが、二連敗すると交代させられるとのことで必死だった。

試合の方は、二連敗することなく、最終成績は、三勝二敗と勝ち越し、ある程度の自信を持つことができた。特に最終日の立大戦では、キャプテンでもあり、ナンバー1シングルスプレーヤーであった東条氏と、三ゲーム戦えたことは、感激であった。

団体戦の成績も、リーグ戦初優勝を飾ることができ、OBはじめ関係者、選手は大変な興奮で、その晩は楽しいドンチャン騒ぎとなり、翌日は、二日酔いで参った。

私は、この頃から何か自分には、強運があるのではないかと、ふと考えたことを覚えている。



夏季合宿においてシャトルに飛びつく

最初が肝心

そして、夏の合宿ではキャプテンとダブルスを組ませてもらい、張り切り過ぎ、合宿の前の自主トレーニングで捻座（足首）をしてしまい、チューブを巻き固定し、一週間は片足で頑張った。

「やればできる。気の持ちようだ」多少のケガでも大丈夫だという強い精神が養われたように思う。

こうして秋のリーグ戦で優勝。インカレは負けたが、個人ではなんとか東西対抗に出場でき、まずまずの成績で終わった。

それにしても、一年生は上級生への気の使い方、そして雑用、厳しいトレーニングと、辛いには辛かったが、今振り返るとその時の思い出が、一番目に浮かぶというか思い出される。

最初が肝心とは、よく言うことで、最初良ければすべて良しである。上級生はもちろん率先して何事も行い、なおかつ下級生に対しては厳しくすればするほど、後になってプラスになることは間違いない。

"三冠王"が高校生に不覚

二年のリーグ戦、インカレは、レギュラーの阿部氏が病気で欠場、これが響き、負けたが、私の個人成績は、関東学生、東日本学生、全日本学生のシングルス三冠王と、最高のシーズンとなり得た、と思うのもつかの間、それをぶちこわす大きな穴が待ちうけているとは、思いもよらぬことであった。

その頃は、秋山氏とのライバル意識は、表面に出さずともお互いに、相手はより以上に自分より努力していると仮定し、自分に叱咤激励し合ったものだ。

コートでも感情をむき出しにし、コートに入ったら上級生も下級生もないと思っていたことは確かで、コートに入ってまでも上級生に気を遣っていては、とても勝つことなどおぼつかない。

そして前に述べた穴とは、オールジャパンで私は、一回戦でインターハイ上位の河村氏（旧姓盛野・高岡市役所）にストレートで負けたのである。

人間、調子に乗ると恐ろしいと思ったのはこの時が、初めてである。この痛恨の黒星がその後、私にとっては何よりもの刺激となり、また教訓として残った。今は河村氏に、厚く感謝している。

（つづく）

われらのクラブ ⑤

ヘビー級で頑張ってま～す

「田園ジャンボクラブ」

何年か前、この誌上に〝スポニチ〟の紙面から一度紹介されたことがあり、今回再度登場するに当り、あの頃より〝ぐん〟と上手になったと記せないことが、ちょっと残念だけれど……。

大田区は田園調布、近くには多摩川の流れがあり、緑に囲まれた一隅に八年前、「何だか身体が重くなって」「私もぶくぶくしてきたわ」「何か運動したいわね」そんなことから〝コートに入ったら母親であり、主婦であることなど全て忘れて、子供に返って楽しもう〟そして細く長くをモットーに、七、八人のメンバーが集まり、田園ジャンボクラブは生れた。



〝写真を撮りますヨー〟〝ちょっと待ってて一〟

この名前をつけるについては重量級がかなり目につき、私はこの名前しか思いつかず、今日まで切り離せない名前になってしまった。（現在ではスリムなメンバーも多いのだが）そして多くの人達から非常にピッタリとしたよい名前であると賞めていただき、嬉しいような、情けないような気がしている。

それにしても年月と技術の向上は伴わぬものと常に嘆いているけれど、上は54歳を筆頭に、五周年を機に数人の若手を加え現在ご主人の勤務の都合でロンドン在住の一人を含め、総勢26名、毎水曜日の午前中、一応基本から始まり、あとはいろいろと相手を替え、その後決ったペアと組んだりして、思い切りゲームを楽しむ。

四面のコートそれぞれに個性豊かな連中が、足の出ない分は口で補い、自分が動けないとペアを動かし、「それ打て!!」「ほらあっち」「それは私がとる!!」など、その賑やかなこと。それでも汗を流し、ストレス解消には大いに役立っているのである。

●線の上はインですって!!

それにしても八年前を振り返ると感無量である。定まったコーチがいるわけでもなく、何にもわからず、ゲームらしき形式で打ち合いながら、「線の上に羽根が落ちたけど、これはどうなるの?」「ラケットの木に当たったのは?」「わからないから今度の練習の時に聞いてくるわ」とその頃始まったばかりの区の教室に練習に行き、ラケットの握り方から少しずつ教えられ、いろいろと質問しては、次の週になると「線の上に落ちたのはインですって」「フレームに当たったのはいいそうよ」などと受け売りをし、何とも頼りないものであった。

服装もスカート丈を短くするのに抵抗を感じ、区の大会など思いもよらなかったが、二年目位から、誘われるままに時折参加するようにはなったけれど、自分の娘の様な高校生に対戦し〝コロコロ〟と出ると負け、大会運営に全面的に協力していたものである。

その間、区の協会の方々を初め、多くの方達のご援助とご協力を頂き、時にはお隣り目黒区



〝ハイにっこり笑って、スマイル、スマイル〟

の〝ダックス〟さんと練習試合をし、そのメンバーの若くそして上手なのにびっくりしたり、都の家庭婦人連盟も結成され、その大会に初参加した時など、敗者審判のため、第一試合に入った数組がほとんど同時に負けてしまい、「ジャンボさん主審ですよ」「ジャンボさん主審よ」とあちこちから声があり、皆審判ができず、私一人ではとても手が回らず、他のクラブの方達に助けていただき、ほっと息をついた思い出もある。

その後技術的には自信を持てないから〝せめて審判なら〟と言えるように、そしてまた試合をするのにいかに審判が大切であるかということが身にしみたので、区での講習会の折には多くの者が受講し、三級審判の資格を得て、〝ルール〟と〝マナー〟を両立させ、しっかりと身につけることに努めてきた。その結果近頃では、大会があっても何となく安心していられるようになった。

●合宿にまで発展

さてそうなると無欲でいたのが、ほんの少し欲も出てくるというもので、楽しむだけでよい人達と、〝もっと思い切り練習をして上手になりたい〟〝試合に出ても時には勝ってみたい〟連中とが出てくるのも当然のこと。何人かの〝バドキチ〟ができても致し方ないことではある。

そんな時、区の協会の行事で仙台に行くことになり、それを兼ねてふと合宿など思いついたのである。この段階ではかなり気楽なものであったが、その指導に当ってくださった二人のコーチが非常に熱心な方々であったため、いかに基本が大切か、それがいかにできていないか、骨身に滲み、合宿の持つ意味を思い知らされた気がした。

この合宿で精神、技術両面で目の覚める思いであった。それから週一回の練習では物足りなくなり、何人かが、引き続き全くの自由意志で、毎土曜日コーチをお願いして練習に励んでいる。一生懸命練習に汗を流した後の充実感は、素晴らしいものである。

ただ、ここで考えなければならないことは、年配者の試合などを抜きにし、本当の意味で〝健康維持と親睦〟を目的としたメンバーと、若年層の〝試合にも多く出たいし、ある程度挑戦もして見たいもの〟との接点をどこに置くか?ということであり、また年齢その他家庭婦人としての行き過ぎを懸念する面もあり、非常にむずかしい問題であると思う。これは、ある年数を重ねたクラブの持つ、避けて通ることのできない事実であると思う。

それら両方の希望を充たすため、かなりやりたい者は九時迄に、そしてのんびり楽しみたい者は十時半頃来るという、自然にそんな時間帯ができ、土曜日練習している者達が、その練習方法をぐっと楽な型に変え、練習の種類などで話が合わなくならぬよう、そしてハードにならぬよう、工夫しながら練習している。

●個人を尊重

確かに八年という年月は長い。それが楽しく続いている理由の一つは、クラブ構成の中で技術のみを重視せず、年配者は豊かな人生経験を持つ立派な先輩として頼られ、それぞれ味のある人柄であり、また技術面では進歩の速い人達が何かとアドバイスするなど、お互いに持ち味をよく活かし、信頼し、協力しあっていること、各人が自分自身を持ち、大人の考え方を持っている反面、精神年齢が非常に若い事。こうしてみると、何か一家族の女三代という感があり、孫を持つ〝おばあちゃん〟も何人かいるし、お袋もいて、そしてお嫁さんがいて、娘もいる。そんな感じがするのである。



●会う喜びと別れの悲しみ

三、四年前から大田区でも多くのクラブが次々と生まれ、それぞれが横のつながりを持ち、より楽しいものにとの意向から家庭娘人部会も結成され、年に二回家族的な大会を持ち、合同練習をしたり、講習会を開いたり、親睦と交流を深めている。

最近六月末にも、各クラブの皆が協力して、第五回の家庭婦人大会を立派に運営し、回を重ねるごとにたのもしく成長し、一つ一つの積み重ねが徐々に形になって表われてくるので嬉しい限りである。

このようにクラブについて記していて一つ悲しいのは、前回この誌上で、最高年齢者として元気な姿を紹介され、若々しく楽しんでいた大正六年生れの鏑木さんが、一昨年の暮癌のため他界されたこと、発足以来本当に我等のホープとして、皆の励みになっていたのに、その急ぎ過ぎた死は残念であり、思いがけず仲間を失ったショックは大きかった。

●ジャンボな輪へ

あれこれ思うにつけ、私達のクラブが今日あるについては、何と多くの人達の協力と援助に恵まれたことか。本当に感謝の気持ちで一杯である。そしてバドミントンを通して、何と多くの人々に巡り合ったことか。あちこちで生まれた小さな輪がどこかでつながり合い、そしてその輪が大きな輪になり、今ではどこにでも仲間がいるという、何かとても豊かな気持ちがする。

先に記したロンドンの仲間もバドミントンを離れがたく、探し求めて地域のクラブに入会したとか、先日の便りに記されてあった。

私達のクラブもまたいろいろなことにぶつかるだろう。けれどバドミントンを通じて、自分自身の健康と多くの人達との親睦を考えながら、大げさに言えばお互いに良き理解者として、また協力者として、楽しく末永くバドミントンをつづけていけることを願っている。

そしてこのように楽しい時を持てるのも、各自の家事のやりくり、努力もさることながら、何といっても家族の理解の上に立ってこそ、可能であることを胆に銘じ、健康に気をつけて、精一杯やってその充実感、満足感の余韻を各自の家庭に還元させ、せめてものお返しをしていくつもりでいる。

（代表　真壁保子）

ファッショナブル・スポーツ——バドミントン。

厳選された豊富さでお応えいたします。 BADMINTON

ファッション性とスポーツ性——この2つをより合わせ持つファッショナブル・スポーツーバドミントンの感覚を肌で感じにいらっしゃいませんか——！

色あざやかにそして機能性も豊かなウェアやバッグなど——バドミントンのすべてが常にフレッシュな状態でスタンバイ。

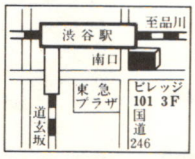
日本最大の専門店 ウインザー ラケットショップ。

毎月曜日定休・祝祭日を除く

渋谷店

東京都渋谷区桜ヶ丘町1-7(ビレッジ101ビル3階) TEL 03-464-9251~2 〒150

●営業時間／午前10時~午後7時30分





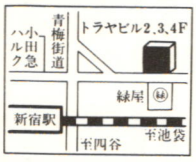


毎月曜日定休・祝祭日を除く

新宿店

東京都新宿区西新宿7-10-20(トラヤビル2,3,4階緑屋前) TEL 03-363-6848 〒160

●●●営業時間／午前10時~午後7時





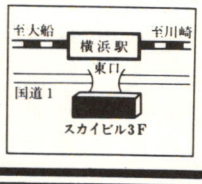


年中無休

横浜店

横浜市西区高島町2-1 横浜駅東口(スカイビル3階) TEL 045-461-1785 〒220

●●●営業時間／午前10時~午後8時



WINDSOR RACKET SHOP

エツコのバドミントン・ライフ③

湯木さん相沢さんとの出会い

栂野尾悦子

畑道を抜け、少しずつゆるい登り坂になってゆく山道の両側では、木の葉がざわざわと触れ合い、野鳥のさえずりやせみしぐれが〝お早よう〟のごあいさつ。

木もれ陽の中を12～3分も走ると、山の中腹にある野田山墓地に到着。たらたら流れる汗をそのままに、木陰に入ると学校周辺の街が一望でき、朝の風がさわやかにほおをなでてゆく。時折、自衛隊のラッパ練習に出くわし、つきぬけるようなその音に、ピリッと一日の始まりを感じたものです。

そんな日が何ヵ月か過ぎ、秋も深まった頃、突然、パートナーのおフ（藤井さん）がクラブをやめるというのです。一度決めたらその意志を貫くしっかり者の彼女は、同級生ながらお姉さんのような良き相談相手だっただけにさすがに寂しく、目前に迫っていた県新人大会には、シングルスのみ出場することになってしまいました。（そのおフが、今は二児のママになって会社のすぐ近くに住んでいるのも不思議な縁です。）

さてその新人大会ですが、試合前のコンディション作りやペース配分など全くわからないまま無我夢中でやっていくうちに、いつの間にか優勝してしまっていたというのが本音です。

この頃はまだインターハイがどういうものかわからず、目標といってもはっきりしていなかったのに、新人大会を終えてから、にわかに周囲がインターハイという言葉を口にするのです。しばらくして、ようやく、それが高校生にとっては最大の目標である全国大会なのだと知り、おぼろげながら、出場してみたいと思うようになったのです。

一年の終わりの冬、金沢市内の大会で、他校の三年生と試合をして負けて帰った時、上級生に負けたことを兄に言うと、「コートに入れば、上も下もない。そんな事を比較していたら強い選手になれないぞ」と叱られてしまい、それ以来、相手がどんな人であろうと自分の全力でぶつかるのがスポーツする者として当り前のことなのだと肝に銘じています。

また、風邪をひいたというと、心配されるより、自分の体を大事にしないのは選手として失格だとゴツンとやられた事もありました。

兄は高校で野球をやっていたので、小学校の頃、夏休みを待ち構えて、父とおそろいの大きな麦わら帽子をかぶり、毎日のように県球場へ通ったものです。甲子園をめざしていた兄は、真っ黒になった腕や顔で、モクモクと夕食をすませ、夜遅くなると、人通りの少ない道路に出て、バットの素振りをしていました。

この上なくやさしく、またたくましい兄に、大きくなったら絶対兄いちゃんのお嫁さんになるんだとすっかり思い込んでいたのが幼い思い出として残っています。

二年の夏、いよいよ弘前のインターハイが自分の身近なものになりました。この時私は大へんなショックを受けました。自分より強い人が数えきれないほど沢山いること。そして、その中でも忘れられない人。今までに見たこともないすばやさでコートを走り、初め


ひと口でパクリ、食欲はいつも旺盛でした

て見る打ち方をする人。それがハイバックであったこと等々……。

私と湯木博恵さんとの、初めての出会いでした。

とにかく、スゴイ!!としか印象に残りませんでした。

二回戦で敗退した私は、強烈なプレーを目のあたりにしながら、まだまだバドミントンへの欲がなかったのでしょうか、決勝まで見ることもせず、十和田湖の遊覧を楽しんで帰ったのです。

インターハイで負けた事のくやしさを、本人は、全国大会というものに自分も出場できたことや、知らない遠い土地で試合できた物珍らしさと同じくらいにしか感じず、淡々としていたのに比べ、当時コーチをしてくれた二水高OBの奥村さんは、それどころか朝早くから体育館で待っているのです。ほんの40分ばかりしか練習できないのにたっぷりとへたばらせてくれるのです。毎日、毎日、ドロップばかりを打ち続けたり、スマッシュを時間いっぱいまで打った日には鉛筆を持つ手が震えて思うように字が書けなかったりで、時時は汽車に乗り遅れてさぼりたいなと思ったりしても、結局は間に合いそうにないと、カバンを振り振り駅までダッシュしてしまうのが常でした。週三回のクラブ練習では足りず、雪道がスリップして車がなかなか思うように進まない峠を越えて、わざわざ福井まで練習にでかけたこともありました。

高校三年生になる春休みのこと、三月といっても北国の春はまだまだ遠く、電車の両窓からは白銀の世界しか見えないある日、石川県内から選手を選抜して、金沢で開催されるインターハイ強化のために、新潟遠征をしました。

出迎えてくれた新潟の選手の中で、チェックのアノラックを着ていた人が、優勝候補の噂が高い、かの相沢さんであることを一目見て直感したのは、何か後のつながりを因縁づけるものがあったのでしょうか……。

この遠征の成果は惨たんたるもので、1ポイント取るのも、苦心してようやく得点できるという具合で、基礎体力、ゲーム展開のかけひき、すべてにおいてレベルが違うことを痛感して帰ったのです。

トレーニングも朝の練習も、あちこちでの練習試合も、決して劣ってはいないと自負していたのにどうしてあんなに差がつくのだろう!!……。わかりませんでした。納得できなかったのです。帰りの電車で、今まで食わず嫌いだったチーズを初めて口にしてみました。

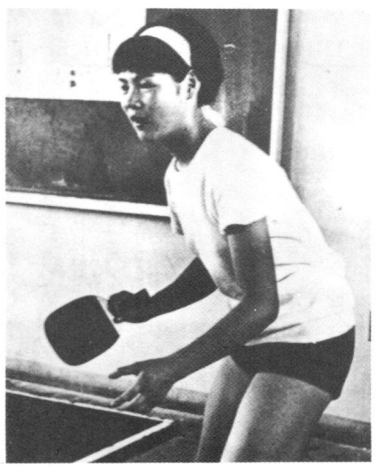
私の中に、ようやくバドミントンへの意欲が湧いてきたのはこの頃からでした。朝の練習も自分からネットを張ってコーチを待つようになり、クラブ後は、暗くなった体育館を何往復もうさぎ飛びやあひる歩きや腕立伏せをし、ふと暗闇に問いかけるのです。インターハイまでに追いつけるだろうか、メタメタにやられてしまった相沢さん達に、どこまで近づけるだろう、いや勝ちたい!!……と。

八月の金沢インターハイは、あまりにもあっけなく幕を閉じてしまいました。シングルスは二回戦で東大阪の池田さんに。イヤミ(坂本さん)と組んだダブルスでは、相沢・金子組に軽くひねられてしまったのです。

わざわざ東京から高橋とも子さんや、硲さんに来ていただき合宿したことも、県の強化練習や小松で成安女子高校との合同合宿も、そして、毎日の練習、すべてが一瞬にして、他人事のようにぷつんと切り離されてしまった思いでした。

誰もいなくなった教会のベンチで何を考えるでもなく、しばらくはただ茫然と天井を見つめていました。

(つづく)


前陣速攻は卓球で身につけました(?)

昭和52年度関東学生バドミントン選手権大会

長谷川、大塚が単・複を制す

Bブロック単は明学大・幸坂(男子)、日女体大・水沼(女子)

梅雨の小休止に 実力伯仲の熱気

降りつづいた梅雨も、ひと休みといった6月26日、昭和52年度関東学生選手権大会は、東京、駒沢体育館において最終日を迎えた。

館内をのどかに飛びかう鳩とはうらはらに、ここまで勝ちすすんだ選手の間には、心なしか緊張感が漂っているようだった。

今大会は、ちょうど大学の教育実習期間に重なり、四年生の大部分は、出場できなかったということもあり、もう一つ盛りあがりに欠けたという感は免れなかった。

関東学生の中では、たった二人だけ海外遠征を経験した近藤小織、米倉よし子(日女体大)のひとまわり成長した姿が見られなかったことは、残念である。しかし七月五日から、群馬県桐生市において行われる東日本学生選手権大会では、今大会の分も活躍してくれるものと期待している。

近年までの大会に比べ、これといったスタープレーヤーが減り、どれもどんぐりの背比べといった顔ぶれだが、その分、実力伯仲したおもしろい試合が展開されたといってよいだろう。

◆Aブロック男子シングルス

▽準決勝

長谷川(中大) 2 — 15-13, 15-6 — 0 管

西村(中大) 2 — 15-7, 15-6, 16-18 — 1 宮崎(慶大)

▽決勝

長谷川 2 — 15-11, 15-8, 11-15 — 1 西村

◆Aブロック女子シングルス

▽準決勝

関根(日体大) 2 — 11-2, 9-11, 11-0 — 1 日山(日体大)

大塚(日体大) 2 — 11-2, 11-6 — 0 大嶌(日体大)

▽決勝

大塚 2 — 11-4, 9-11, 12-11 — 1 関根

◆Aブロック男子ダブルス

▽準決勝

西村 長谷川(中大) 2 — 15-13, 15-4 — 0 小倉 小浜(青学大)

山本 高橋(日大) 2 — 15-4, 15-8 — 0 米山 管(中大)

▽決勝

西村 長谷川 2 — 15-13, 18-13 — 0 山本 高橋

◆Aブロック女子シングルス

▽準決勝

関根 大塚(日体大) 2 — 15-9, 15-6 — 0 高沢 内岸(東女体大)

原田 石田(日女体大) 2 — 17-16, 15-10 — 0 藤井 山田(日体大)

▽決勝

関根 大塚 2 — 15-3, 7-15, 15-3 — 1 原田 石田

◆Bブロック男子シングルス

▽準決勝

京屋(明学大) 2 — 15-9, 15-10, 1-15 — 1 松原(東農大)

幸坂(明学大) 2 — 15-8, 11-15, 17-14 — 1 来栖(玉川大)

▽決勝

幸坂 2 — 15-9, 17-14 — 0 京屋

◆Bブロック女子シングルス

▽準決勝

水沼(日女体大) 2 — 11-7, 11-8 — 0 松枝(日体大)

樋渡(日体大) 2 — 12-11, 8-11, 11-5 — 1 内田(日女体大)

▽決勝

水沼 2 — 11-6, 11-4 — 0 樋渡

◆Bブロック男子ダブルス

▽準決勝

松原 五十嵐(東農大) 2 — 15-9, 15-12, 9-15 — 1 榎本 来栖(玉川大)

古川 五十嵐(慶大) 2 — 18-17, 15-12 — 0 杉山 柳生(千商大)

▽決勝

古川 五十嵐 2 — 15-6, 15-7 — 0 松原 村松

◆Bブロック女子ダブルス

▽準決勝

水沼 内田(日女体大) 2 — 15-8, 15-2 — 0 青木 山崎(日女体大)

樋渡 中島(日女体大) 2 — 15-1, 15-10, 7-15 — 1 佐々木 栗田(日大)

▽決勝

水沼 内田 2 — 15-8, 15-7 — 0 樋渡 中島

長谷川、攻撃力に勝る

〈長谷川×管〉

どちらも好調とは言えないすべり出しだったが、ミスの少なさという点で、長谷川が第1ゲームをものにした。

第2ゲーム、管は本来の彼らしいきびきびした動きをとりもどし、8—2とリードし、このまま押し切るかに見えたが、長谷川の手首をきかせた速い攻撃に、あっという間にばんかいを許し、その後は五分の試合展開となった。

はちまきをして頑張った管だったが、惜しくも2—0という結果で、長谷川に軍配があがった。

互角の大相撲

〈西村×宮崎〉

いつもは、拾って拾って相手のミスを誘う宮崎だが、スマッシュを多く使った強気のプレーを見せた。

一本一本が本当に長いラリーの応酬で、隣りの長谷川—管のコートとは、対照的な試合展開となった。

一進一退の好ゲームで13—13のセッティングとなり、宮崎が第1ゲームを先取した。

第2ゲームに入り、もう後へは一歩もひけないといった執念のネットインが決ってからの西村は、見違えるほど動きがよくなり、このまま押し切るかに見えた。しかし相手は、ねばることでは誰にも負けないと定評のある宮崎。

後半両者とも疲れが見えはじめたところで、宮崎の痛いカットミス。その機に乗じ西村が連続的にポイントをあげ第2ゲームをものにした。

スマッシュが決定打とはならず、長いラリーの末で一本一本をとっていくといった試合内容だったが、最後は結局西村がねばり勝ち、ファイナルゲームをとり、決勝へ進出した。

ベスト4入りの三人までを中大勢が占め、ただ一人敵陣で頑張った宮崎だったが、惜しくも西村の前に、その望みを絶たれた。

西村に準決の疲れ

〈長谷川×西村〉

ほぼ予想通り西村・長谷川のダブルス2年連続優勝ペアによる対決となった。

順当に勝ち進み、いつものようにリラックスしきった長谷川、準決勝で宮崎と死闘を演じファイナルの末、これを破った西村の疲労、と最初は長谷川有利の声がささやかれたが、いざ試合が始まると、さすがに両者とも疲労の色が濃い。

右ひざのサポーターにも象徴されるように、動かない足をひきずりながらの西村であったがよく頑張り、第1ゲームをものにした。

第2ゲームに入ると、前にもどりきれない西村の動きをよくよんだ長谷川のネット前がよく決まり、西村自身のミスも手伝い、ゲームはファイナルへともつれこんだ。

長いラリーがつづくと、さすがにタフな二人もしばらくはしゃがみこむといった、痛々しいゲーム展開となり、一進一退のままファイナルゲームも中盤を迎えた。チェンジエンドの後、長谷川は一気にマッチポイントまでこぎつけたが、最後の一本をなかなか思うように決められず、数回のサービスオーバーを繰り返した。西村も最後の関東選手権であるということでよく食い下がったが、遂に力尽き、決勝の幕は降りた。

結局、両者の持ち味が十分に発揮されたとはいいがたい試合であったとも言えるが、連日の試合の上、最終日に四試合をこなすというハードスケジュールでは、無理もないと言うべきだろうか。

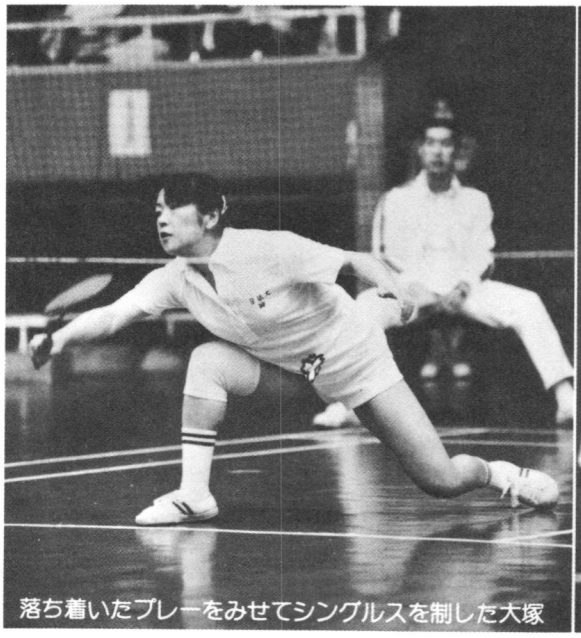
素質が〝チラリ〟大嵩

〈大塚×大嵩〉

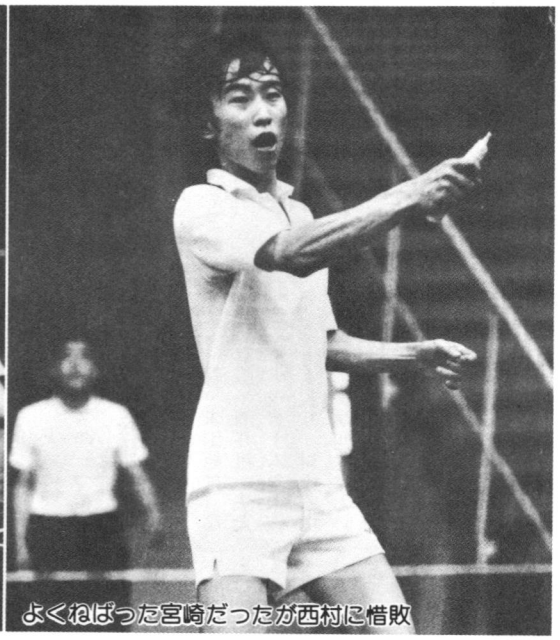
同じ三年生同志の対戦となったが、実力の差は隠せなかったようである。

大嵩のきれいなフォームから繰り出す切れのよいショットも一本一本がフェイントぎみの大塚のショットについてゆけず、いやでもレシーブにまわされるというゲーム展開だった。

試合は結局、一方的に終わったが、大嵩は最近目立って実力をつけてきた選手の一人で、そのプレーの素直さは、これからもまだまだ成長の可能性を秘めているといってよいだろう。



落ち着いたプレーをみせてシングルスを制した大塚



よくねばった宮崎だったが西村に惜敗



評判どおりの強さを発揮して2連勝を飾った西村(左)・長谷川

日山の復調に期待

〈関根×日山〉

日体大からは唯一の四年生として出場した日山は、順当に勝ちすすみ、一年後輩の関根との対戦となった。

一昨年、昨年とひざの故障がつづいた日山は、まだその後遺症からか、やはり前にもどる一歩が遅くなりがちである。

第1ゲームを落とした日山は第2ゲームに入り、持ち前の長身を生かしたプレーで関根のミスを誘い、ゲームはファイナルへともつれこんだ。

両者、コーナーをうまくつかったていねいな試合運びであったが、ミスの少ない関根が11—1とファイナルゲームをとった。

ポイントの上では一方的と思われるが、内容は五分といってよい試合だろう。

興味そそる初対戦

〈大塚×関根〉

予想通りの決勝戦となった関根—大塚の一戦だが、意外にも学生大会の中での二人の対戦は今回が初めてで、観戦の人々もなかなか興味深かったのではないかと思う。

西村、長谷川と同じように、彼女らも今日すでに三試合をこなしており、相当の疲れは予想された。

新潟青陵高校時代からのダブルスペアで、お互いのプレーを知りつくしているだけに、試合は第1ゲームから激しいシーソーゲームの展開となった。

惜しくも第1ゲームをセッティングで失った関根は、ミスの多くなった大塚を左右にゆさぶり、長身からの持ち前の攻撃力で第2ゲームをとった。

ファイナルゲームとなっても二人は疲れを表わさず、まさに男性顔負けのダイナミックな、パワーのバドミントンを見せてくれた。

最後は関根のスマッシュミスで、ゲームオーバー、大塚の優勝が決まった。

昨年の東日本学生選手権大会(青森)において優勝を遂げてから、一歩一歩着実に力をつけてきている大塚だが、今大回において改めてその位置を不動のものにしたと言ってよいだろう。

今後が楽しみ青学ペア

〈西村・長谷川×小倉・小浜〉

第1ゲームは、小倉・小浜組が、ペースをつかめないまま、西村・長谷川組の一方的なゲーム展開で終わった。

第2ゲーム前半は、第1ゲームにつづいて、西村・長谷川組が連続してポイントをあげたが途中から小倉・小浜組が相手のミスを誘って盛り返し、13—14まで追い込んだ。しかし結局セッティングには持ち込めず、一つ余裕のある西村・長谷川組の勝利に終わった。

しかし小倉・小浜組は、弱冠一・二年生のダブルスながら、第四シードの鏑木・平野組(日体大)を2—0でくだし、ベスト4入りを果たしたということは、言わば伏兵とも言うべき存在であり、彼らの活躍を予想した者は、少なかっただろう。

奈良市立一条高校時代からペアを組み、インターハイでも第三位という実績があるだけに、今後のリーグ戦、新人戦などにおいて、大いに期待をよせたいダブルスの一つである。

管・米山、波にのれず

〈山本・高橋×管・米山〉

管・米山組は、第二シードの富田・酒井組(法大)を、ファイナルゲームの末破ってのベスト4入り、対する山本・高橋組は、ダブルスにおいては、伝統的な強さを誇る日大の意地をかけてのベスト4入りであっただけに、双方ともこの対戦への意欲は、大いに観客をわかせた。

しかしどちらも今年になって初めて組んだペアであるためか

コンビネーションの点で、今一つという感は免れなかったが、山本のねばりと、高橋のセンスのよいプレーが光って、管・米山組に本来の調子を出させないうちに、2―0と勝負をつけた。

健闘ひかる山本・高橋

〈西村・長谷川×山本・高橋〉

決勝戦は、さすがに実力ペア同志の顔合せとなり、第1ゲームから白熱した試合が展開された。

西村は、この試合の前に行われた、シングルス準決勝での対宮崎戦がひびいているようで動きが悪く、前半は苦しいゲーム内容となったが、一本一本に声を出しながらのプレーに、彼らの優勝に対する意欲が感じられた。後半に入ると、昨年の優勝ペアらしい落ち着いた試合運びで、13オールのセッティングに持ち込み、第1ゲームを逆転勝ちした。

第2ゲーム、もう後へは一歩もひけないといった山本・高橋組は、前半を彼らのペースで展開し、リズミカルで、切れのよい攻撃が決まりだした。しかし中盤に入ると、両ペアともにミスが目立ち、一進一退のシーソーゲームとなったが、長身の有利さを生かした西村・長谷川組の攻撃が要所要所に決まり、第1ゲームにつづき、第2ゲームをものにし、昨年、今年と連続優勝を飾った。

試合後、西村・長谷川の互いに握手を交わす姿が、苦しい試合内容であっただけに、なかなか印象的だった。

頑張れ沢内

〈関根・大塚×沢内・高岸〉

あまり波乱のないというのが女子ダブルスであるが、その方程式を証明するように、四シードが順当に勝ちすすんだ。

関根・大塚―沢内・高岸の顔合わせはこれまでに何回か行われており、関根・大塚は無敗であるため、沢内・高岸の雪辱戦となった。

一年の時のデビュー戦が華々しかっただけに、最近の沢内の不調はさびしい気がする。沢内のセンスの良さと、高岸ののびのびしたプレーが復活すれば、今以上の活躍が期待できるだろう。

関根・大塚も調子はよくないまでも、余裕のある勝ちっぷりで決勝へすすんだ。

攻撃力に一日の長

〈原田・石田×日山・藤井〉

今大会で初めてペアを組んだ原田・石田の二、三年生ダブルスと、こちらも今年になってペアを組んだ日山・藤井の一、四年生ダブルスの対戦となった。

どちらもコンビネーションの点でまだしっくりいかない様子だったが、原田は石田を、日山は藤井をよくカバーし、好ゲームを展開した。結局攻撃力の点で上まわっていた原田・石田組が勝ち、決勝へすすんだ。

藤井はさすがにダブルスのうまい新潟青陵高校の出身で、インターハイダブルス二位の実績を持っている。まだまだミスは目立つが、その気持ちのよいプレーが目をひいた。

キャリアの差、歴然

〈関根・大塚×原田・石田〉

激戦を勝ち抜き、決勝戦に進出した両者であるが、昨年の活躍で貫録を見せる大塚・関根組に対抗し、原田・石田の新ダブルスが持ちまえのねばりを発揮するか、文字通りの決勝戦となった。

第1ゲーム、大塚・関根組の攻撃がさえ、終始押しぎみの早いペースで原田・石田組のレシーブミスを誘い、中盤からもおな差がひらいていった。一方、原田のリードで石田懸命のレシーブだったが、ペースを取りもどすことができず、ばんかいの余地のないまま15―3と押し切られた。

第2ゲームになると、ねばりを出してきた原田・石田組は初めてのリード。ペースを乱された大塚・関根組に対し、原田のスマッシュによる攻撃がさえ、そのまま原田・石田組がこのゲームをとった。

やはり決勝戦らしく、白熱した試合となり、勝敗はファイナルに持ち込まれた。両者一歩も引くことなく、長いラリーがつづき、シーソーゲームの展開となった。しかしダブルスのパターンができあがっている大塚・関根組に対し、原田・石田は、今大会初ペアということもあり今一歩およばなかったようである。

決勝戦にふさわしい長い試合であったが、結局最後は15―3と大塚・関根組がとり、初優勝を飾った。


あぶなげないプレーで完勝した関根(左)・大塚

いまうわさの……



S-76 スーパーラッシュ

極細の特殊加工スチールテーパーシャフト使用。
反発力が一段と増し、抜群の攻撃力が生まれプレーヤーの持っている力を十二分に発揮出来るすばらしいパートナーが出現しました。

play with...
SunBatta

SUNBATTA

徳田・高田を派遣

オーストラリア ニュージーランドへ

このたび、ニュージーランドバドミントン協会創立50周年記念世界招待大会、オーストラリア・シルバーボウル国際招待大会に女子選手2名の招待があり、徳田敦子選手（21歳、サントリー株式会社勤務）、近藤小織選手（21歳・日本女子体育大学）、の派遣が決まり7月9日、20時30分発カンタス航空で、当地へ向け出発しました。

日程は次のとおりです。

◎7月13日～17日、ニュージーランドバドミントン協会創立50周年記念世界招待大会＝オークランド市。

◎7月23日～24日、オーストラリア・シルバーボウル国際招待大会＝メルボルン市。

7月30日、帰国。

なお、この両大会には、先の世界選手権大会男子シングルス優勝の、フレミング・デルフス、同大会女子シングルス優勝の、リーン・コーペン（ともにデンマーク）をはじめ、カナダ、マレーシア、メキシコ、オランダ、シンガポール、タイ、ニュージーランド、オーストラリアの選手の参加が予定されています。

テニスの話題 〝さすが〟エバート

〝全英選手権〟といっても、これはテニスのお話ですが、その全英テニスの模様を、7月1日の報知新聞は次のように伝えています。

ウィンブルドン全英選手権第9日は29日当地で女子シングルスなど準決勝が行われ、連続優勝確実と見られていたクリス・エバート（米国）がバージニア・ウェード（英国）に2－6、6－4、1－6で敗れる大番狂わせがあった。（中略）

ウェードは人が変ったように、終始沈着な、自信に満ちたプレーで、エバートを圧倒した。互いに1セットずつを取って迎えた最終セットの第1ゲーム、アドバンテージを取ったウェードの短いサーブをエバートは懸命に前進して拾った。「2バウンド後に打った」というウェードの抗議を審判は無視しようとしたが、エバートが「2バウンドだったと思う」と申し出て、審判もジャッジを変更した。

これで第1ゲームをものにしたウェードのプレーは、1万5千人の観衆の声援の中で、ますますさえた。第7ゲームの大詰め、エバートのショットはベースラインを越えたかに見えだ。しかし、審判のコールがなく、ウェードはあわてて打ち返したが、すでにその時エバートは、握手を求めにネットへ走るという奇妙な幕切れ。

試合後、エバートは「審判のコールがあろうとなかろうと、あのショットはアウトだった」と語った。

さすがにテニス界の〝女王〟エバートですね。勝った時は誰でも愛想がいいもの、負けた時のこの印象が、エバートの品格を表わしているようです。

敗戦にも動じない大陸的な面も感じられて、スケールの大きさがしのばれます。

◆インターハイ出場校・選手〈6月24日以降7月15日までに到着の資料〉

▼和歌山県
BT・耐久（村崎敦美）
GT・新宮商業（森稔）
BS・岡（耐久）

▼鹿児島県
BS・木戸（耐久）
GS・中野（新宮）
GS・桑添（大成）
BD・岡・木戸（耐久）
BD・長尾・浦（耐久）
GD・中野・浜口（新宮）
GD・市ノ瀬・前（御坊商工）

▼静岡県
BT・沼津東（中島鎮也）
GT・藤枝西（藤沢稔）
BS・岡田啓一（沼津東）
BS・佐野康之（吉原工業・中田稔）
GS・加塩淳子（藤枝西）
GS・青木はつ代（藤枝西）
BD・岡田啓一・岩佐浩之（沼津東）
BD・佐野康之・山崎章（吉原工業）
GD・加塩淳子・小田あさ子（藤枝西）
GD・渡辺貴美子・遠藤睦子（富士宮東・石川博義）

▼埼玉県
BT・小松原（中村恭治）
GT・県立川越女子（柿沼清）
BS・佐藤治（大宮西）
BS・鈴木正彦（八潮）
GS・大塚貴子（川越女子）
GS・服部久美子（越ヶ谷）
BD・佐藤治・佐藤富雄（大宮西）
BD・中山和宏・斎藤肇（小松原）

▼茨城県
BT・県立石岡第一（紙塚博・佐藤利昭）
GT・県立太田第二（佐藤淑江）
BD・多田・鈴木（県立石岡第一）
GD・助川・寺門（県立太田第二）
GD・椎名・吉原（県立太田第二）

▼栃木県
BT・県立今市
GT・県立真岡女子
BS・久郷俊明（県立今市）
BS・角田光永（県立今市）
GS・添野としみ（県立真岡女子）
GS・上野加代子（県立真岡女子）
BD・久郷俊明・角田光永（県立今市）
BD・関根忠・柳誠（真岡農業）
GD・添野としみ・高田圭子（県立真岡女子）
GD・上野加代子・高田康子（県立真岡女子）

▼鹿児島県
BT・川内商工（永川是明）
GT・鹿児島（東平正三）
BS・木原正輝（川内商工）
BS・山下浩二（鹿児島）
GS・原口ますみ（鹿児島）
GS・久永福美（鹿児島）
BD・木原正輝・内野和仁（川内商工）
BD・武田健一郎・堅山祐二（鹿児島商業）
GD・原口ますみ・久永福美（鹿児島）
GD・安楽成美・小森園千晶（鹿児島南）

▼南北海道
BT・札幌創成（藤野正幸）
GT・札幌静修（谷浦隆）
BS・木村篤（栗山・高橋健次郎）
BS・中島俊也（北海・桜居義久）
GS・星川喜恵子（札幌静修）
GS・林孝子（札幌啓北商業・菊池義子）
BD・高橋隆・高橋光夫（札幌創成）
BD・西村晃・福原英樹（函館工業・田中旦夫）
GD・星川喜恵子・中尾ひろみ（札幌静修）
GD・林孝子・佐藤純子（札幌啓北商業）

▼北北海道
BT・帯広柏葉（上山功夫）
BT・砂川南（溝田英龍）
BS・佐々木道裕（釧路商業・佐々木祐一郎）
BS・千葉昌弘（帯広柏葉）
GS・大庭かおる（釧路商業定時制・渡辺俊克）
GS・遠藤伊津美（中川商業・柳沢政利）
BD・後藤誠・堀信浩（帯広柏葉）
BD・千葉昌弘・中川憲昭（帯広柏葉）
GD・佐藤朱美・中村悦子（砂川南）
GD・桝田令子・竹川さより（滝川西・山名国裕）〈以上〉

大会スケジュール

昭和52年大会予定カレンダー

◆国内◆

▼すでに行われたもの

第8回全日本女子チャンピオンズトーナメント（4・24）
▽第27回全日本実業団選手権大会（6・17～22大阪・京都）

▼これから行われるもの

▽第28回全国高等学校選手権大会（8・1～6倉敷）
▽第16回全日本教職員選手権大会（8・8～12下関）
▽第7回全国中学生大会（8・15～17伊勢）
▽第3回全日本男子オールスターダブルス（8・28東京）
▽第20回全日本社会人選手権大会（9・15～18真岡）
▽第32回国民体育大会（10・3～6青森県浪岡）
▽第26回全日本学生選手権大会（11・1～7鳥取）
▽昭和52年度全日本総合選手権大会（12・14～18東京）
▽第5回全日本実業団対全日本学生対抗（1・16東京）
▽昭和52年度全日本総合選手権大会団体戦（2・25、26東京）
▽第9回全日本女子チャンピオンズトーナメント（2月東京）
▽第6回全国高等学校選抜競技会（3・19～21東京）

◆国際・海外◆

▼すでに行われたもの

▽第1回世界個人選手権大会（5・3～8スウェーデン）
▽ニュージーランド・オーストラリア招待（7月中旬～下旬）

▼これから行われるもの

▽第6回日中親善試合（7月中旬または11月中旬～下旬東京）
▽オーストラリア・オープン（8・27～9・2）
▽カナダ交流試合（未定）
▽カナダ・オープン（10・27～30）
▽第8回世界女子選手権（ユーバー杯）大会アジア地区予選対韓国戦（10・23、30東京）
▽スウェーデン・オープン（1・6～8）
▽デンマーク・オープン（3・8～11）
▽第68回全英選手権大会（3・15～18）
◎ユーバー杯大会アジア地区予選対韓国戦に勝つと3月31日までに、マレーシア対インドの勝者と、アジア地区決勝を行う。

編集室から

◆実業団特報いかがですか？　今年は例年に比べ気温が低く、また3回戦をシードされた選手も多く、過酷な大会といわれているこの大会も、いく分楽になったようです。

◆京都の会場には、わが「バド界」も、メーカーの方達と肩を並べて店を開きましたが、何しろ野暮ったい〝おじさん〟が立っているのですから、売行きの方は、大会スケジュールほどスムーズではありませんでした。

◆これからも、取材に出かけた際には、できるかぎり〝店開き〟したいと思いますので、どうぞご利用ください。

◆ようやく、予告したとおりに、7月25日に、写真集〝**ヨーロッパ選手にみる実戦テクニック**〟を刊行いたしました。連続写真が豊富に載っており、それぞれに一流選手の解説がついています。これもまた、インターハイや、全国中学生大会の会場で発表する予定です。

◆よく東京周辺の記事に、かたよりすぎている、というお便りを受けとりますが、編集部もやっと軌道にのってきましたので、徐々に改善していくつもりです。

◇便利な定期予約購読をどうぞ◇

◉バドミントン界は、わが国唯一の専門月刊誌です。一般の書店では販売しておりませんので、ご購読ご希望の方は、本誌巻末とじ込みの振替用紙でお申し込みください。

◉本誌は1部 300円ですが、1年間予約なさいますと、3600円のところを3000円に割引きとなりますので、便利で割安な定期予約購読をご利用ください。また日本バドミントン協会登録会員の方は、さらに 200円割引きとなり2800円です。

◉お申込み方法はかんたんです。巻末とじ込みの振替用紙に必要事項をご記入のうえ、お近くの郵便局から代金をお振り込みください。手数料はかかりません。

バドミントン界　通巻第94号　1977年8月号　定価 300円

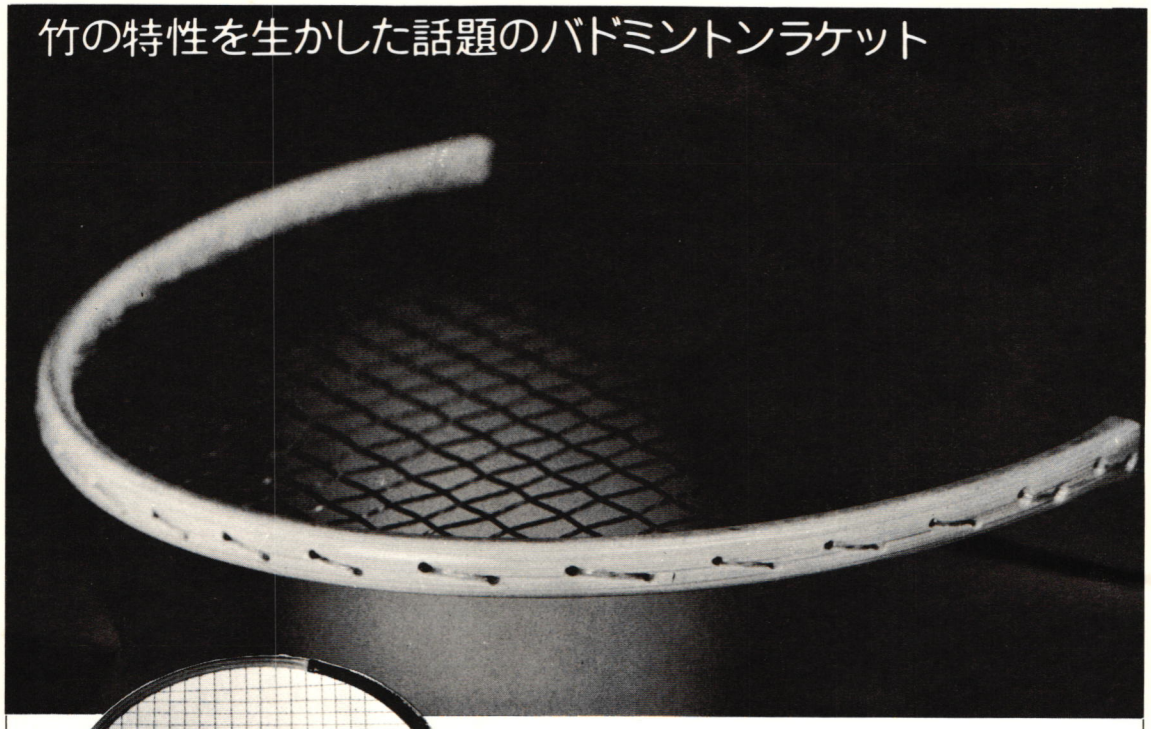
52. 8. 1
昭和~~52年 7月 8日~~ 発行
編集人／赤星　三樹
発行人／秦　浩

©1977　無断転載を禁ず

発行所・日本バドミントン協会
郵便番号150 東京都渋谷区神南1－1－1　岸記念体育会館
電話　03－467－3111(代表) 内線351
振替　東京5-32193(協会)　東京5-9525(編集部)

うなる打球/格調のバンブー

竹の特性を生かした話題のバドミントンラケット



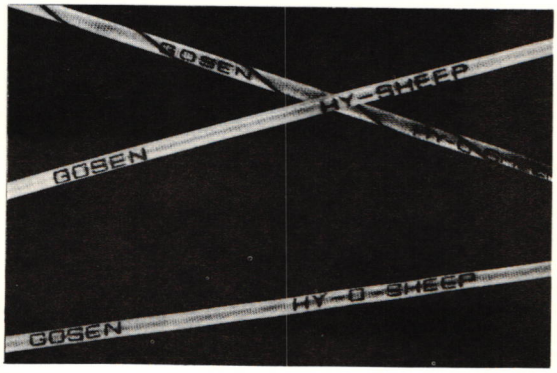


Hy-Thomas

No. B45 ハイ・トーマス(バンブー) ¥4,500　★最高級選手用ロングテーパーシャフト フレーム・カバー付

最後まで勝ち抜くもの/品質保証のビッグなガット



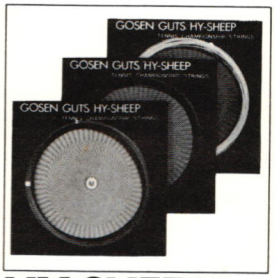




HY-O-SHEEP

No. 1090/1091 ハイ・オー・シープ ¥600

由入特殊ガット最高級品選手用(アンバー・青スパイラル)



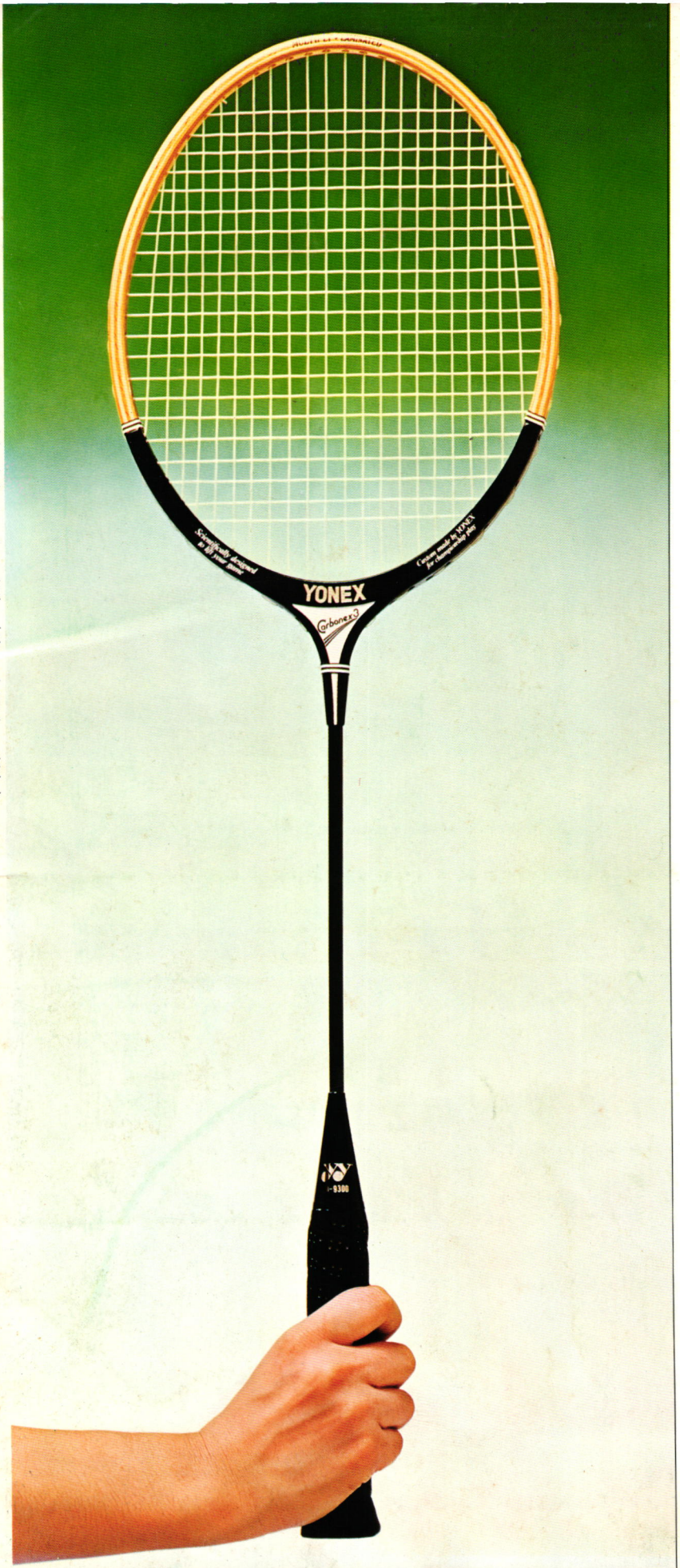
HY-SHEEP

No. 1060 ハイ・シープ　¥400

選手用(アンバー・赤・青)

株式会社ゴーセン
■本　社●大阪市東区豊後町4　☎06(942)5816代
■東京支店●東京都台東区蔵前4-14-2　☎(03)862-6576代
■福岡営業所●福岡市中央区薬院1-4-8　☎(092)712-5247代

月刊「バドミントン界」8月号
昭和五十二年八月一日発行（毎月一回一日発行）
昭和四十四年十二月二十三日 第三種郵便物認可
発行所
東京都渋谷区神南一ノ一ノ一
岸記念体育会館内
日本バドミントン協会
定価三〇〇円



凄いのが生まれた、カーボネックススリー。

ヨネックスがまた、世界で初めてということをやってのけました。それが、初のカーボンシャフトをもつラケット、カーボネックススリー。強烈な反発力。そしてすべてのストロークにぴたりと適合するというたぐいまれな特性は、まさにカーボンならではのもの。いわばオールマイティなラケットといえましょう。世界のトッププレイヤーが力から技へそしてまた力へと移ってきた今、その変化に応えられるのはこれ、カーボネックススリー。

B-9300 Carbonex3

●カーボネックス スリー《新製品》……¥7,500

YONEX